

A. F. マイエルベルクのロシア見聞録・スケッチ画帖について

The Album of Sketches of Russian Daily Life in the late 17th Century,
drawn by Painters who accompanied the Mission of A. F. Meyerberg who
wrote The Record of my Journey in Russia *Inter in Moschoviam...* on the
Mission sent by the Holy Roman Empire

坂 内 徳 明

BANNAI Tokuaki

1.

17 世紀末にピョートル大帝が登場するまでのロシア（ルーシ）は、西欧を中心とした同時代のグローバリゼーションからほとんど隔絶していた。むろん、ビザンツならびにイスラム世界、アジア、そして西洋との接触は皆無でなかったものの、それらは全体として見ればきわめて断片的・エピソード的であり、それらの交渉がロシア社会の中に他者意識を醸成するにはいたらなかった。その意味で、17 世紀半ばまでのロシアは自己・自他認識としての文化を獲得することなく、ある種の文化的「鎖国」状態に置かれていたと言える。

しかし、だからこそ、この閉鎖的で孤立する「異国の地」であるモスクワ大公国（モスコヴィア）を訪問し、観察したいという個人の始源的欲求・動機とその集合態としての社会的移動・運動が持つ意味は大きい。特に、15 世紀後半からピョートル大帝による「近代化」開始前までの時期に書かれた数多くのロシア旅行記は、一義的には外交・通商上の利益獲得を目的とする使節団による報告書の形式を取りながら、そして、そこには、あまりにも少ないロシア情報から生じた多くの誤解と偏見が認められるにもかかわらず、「神秘」「未知」と「未開」の国ロシアに対する強い好奇心が充ち溢れ、精密な観察にもとづく興味深い記述を無数に含むのである。「遠く離れた森のモスコヴィアほど、西欧の旅行者が繰り返し、そして詳しく記述された国は西ヨーロッパには一つもない」¹ という B. O. クリュチェフスキイの言葉は、多少割り引いても、そしてその真意の理解については議論が分かれるとしても、問題の所在を的確に示している。

西欧旅行者によるロシア記述の意味はいかに考えられるだろうか。近年、西洋人による中世ロシア旅行記研究を集大成した観のあるアメリカの歴史家マーシャル・ポーが、それらのある種のエスノグラフィとして読もうとしたこと² は基本的に評価される。ロシア中世期の旅行記は、日誌、外交報告といったジャンルに狭小化して読まれるべきではなく、また、自らのディシプリンに拘泥するあまり細部考証のみの資料として利用すべきではない。結論から言えば、それは、文化の記述としての民族誌の基本的スタンスと方法を要求する有意なテキストとして

¹ Ключевский, 1991 : 5.

² Poe, 2000. 外国人のロシア旅行記に関する研究史については、後述 5. ならびに注 47 を参照。日本での研究は、古くは加藤, 1987、田辺, 2001、中村, 2006 他。

理解すべきと考えられる（同時にそれらが、同時代の西欧における科学的精神の賜物とその成果であったことは忘れてはならない）。

ヨーロッパ、ビザンツからモスクワを訪問する動きが始まる 15 世紀半ば以降 17 世紀末まで、A. コンタリーニ、S. ヘルベルシュタイン、A. チャンセラー、A. ポッセヴィノ、J. ホーセイ、J. フレッチャー、S. コリンズ、A. オレアリウス、そして本稿で取り上げる A. マイエルベルク等々枚挙にいとまがないほどのロシア旅行記が書かれ、それが西欧社会で争うように読まれたことは、西欧とロシアの双方にとってきわめて大きな文化史的事件となった。この点にこそ、ロシア旅行記の精神的意味があるのではないだろうか。

ところで、17 世紀のモスクワ・ルーシが、後続するピョートルの出現との関連から見て改革「前夜」として、政治的・経済的・社会的のみならず文化的にも大きな転換点にあったことは繰り返し指摘されてきた³にもかかわらず、今なお「ロシア史研究でもっともなおざりにされてきた時代の一つ」⁴であることは疑いない。その理由は、たんに資料の量的不足ではなく、質的問題にある。というのは、この時期のロシアが「世俗化の脆弱さ」ゆえに上記の自他認識を十分獲得していなかった、言い換えるならば、自らの国・社会の在り様だけでなく個人の感情・メンタリティも含めた生活・習俗のレアリアを書き記そうとする関心と動機がきわめて弱く、そもそも、記述のための「文体」が生まれていなかったからである。ロマノフ朝第二代アレクセイ帝の時代（在位 1645 - 1676）は、西欧世界でいまだ明確なロシア像が形成されない一方、ロシア社会が文化的「地殻変動」を経験する時期であった。17 世紀、特に世紀半ば以降、西欧とロシアは互いを「他者」として意識し、両者の相互認識がようやく交錯しあい、特にロシアが西欧という「外なる他者」のみならず、自らの「内なる他者」を意識し始めた転形期だったのである。だとすれば、この時期に記されたロシア見聞録の重要性は十分推し量ることができる。

17 世紀のロシア旅行記の白眉として高く評価されるのはアダム・オレアリウス（ロシア訪問時期は 1634-1635、1636、1638-1639、1643）とアウグスト・フォン・マイエルベルク（同、1661-1662）によるものである。本稿の目的は、神聖ローマ皇帝の派遣使節としてロシアを訪問した後者が書き残した見聞録を取り上げ、特に、そこに添付されたと考えられる画帖のスケッチ細部に着目してその習俗誌的意義について素描することにある。

2.

マイエルベルクの生涯に関してわれわれが知ることは、きわめて少ない⁵。彼は 1612 年 8 月、下シュレジエン（シレジア、シロニスクとも表記）で貴族マイエルン家に生まれた（マイエル

³ 17 世紀を文化レベルでの転形期とする実証研究は、ソビエト期にも盛んに行われた（全ロシアの市場の形成が 17 世紀に始まるとしたレーニンのテーゼとの関連性については多くの検証が必要）。例えば、17-18 世紀初頭の文学における「移行期」を検証しようとしたロビンソン、ベルコフらの仕事（Robinson, 1971；Берков, 1971）、さらにパンチェンコによる刺激的な問題提起・総括的労作（Панченко, 1984）は古典。近年の文化史的概説・教科書でも、この問題設定は十分意識され、継承されている（Карпов, 1994；Кантор, 1999）。さらに、本格的な「過渡期文化論」として Черная, 1999 は重要な論点を提供してくれる。

⁴ ラエフ, 2001：1。

⁵ Аделунг, 1827；Ловягин, 1903；Бочкарев, 2000 (1914)：238-239；A. K. (1896、ブロックハウス百科事典の記載だが、記述にミスが多い)；Алпатов, 1976；Миллюков, 2000（『祖国史 百科事典』第 3 巻）。

ベルクの名の使用は1668年にバロンの称号を与えられて以降のこと、正式名はAugustin von Meyerberg、ロシア訪問時はマイエルンだが、以下ではマイエルベルクとする)。ラテン語で書かれた彼の見聞録で使用された人名・地名等のスラヴ語表記の巧みさから祖先がスラヴ起源ではないかとの記述もあるが⁶、確証はない。彼は最初、下シュレジエンの町グウォグフ(グローガウ、現ポーランド)で、神聖ローマ皇帝フェルディナント3世(在位1637-1657)治下の税控訴庁で勤務した後、息子で後継のレオポルト1世(同1658-1705)によってウィーンへ招聘されて宮廷顧問官となる。以後、外交使節としてヨーロッパ各国へ遣わされ、選帝諸侯はじめ、チロルのフェルディナント大公、トランシルバニア公ラーコーツィ・フェレンツ2世、ポーランド王ヤン・カジミエシとミハウ・コリブト、トルコのスルタンのマホメット4世、デンマーク王クリスチャン5世、そしてモスクワ大公国のアレクセイ帝等々多くの要人に拝謁した。派遣期間は通算21年にわたったという。その後、下オーストリアの高官として働き、やがてそれを退職し、自身の領地がトルコ軍によって破壊される中、1688年3月23日に76歳で死去、ウィーン市内の宮廷教区聖ミハイル教会内に埋葬された。彼には三人の娘が残されたため、家系は絶えたとされる⁷。

彼が多くの宮廷・権力者のもとへ派遣された背景には、17世紀前半から後半にかけてヨーロッパをめぐって大きく混迷する国際状況があった。この時期の神聖ローマ帝国は、30年戦争終結後のウェストファリア条約締結(1644)によって統一国家から主権を持つ300もの国家の連合体へと変質し、事実上の崩壊過程に向かっていた。それでも神聖帝国はヨーロッパ世界の秩序統合のヘゲモニーを握り、帝国の権威の回復をめざして奮闘しなければならなかった。それが、弱冠17歳で皇帝に即位したレオポルトに課せられた大きな使命だった。その意味で、マイエルベルクの生涯が精力的な外交活動に捧げられたのは当然である。彼のモスクワ大公国への派遣目的は、ロシアとポーランドという、ともにキリスト教徒同士の「悲しむべき流血を中止し、北の地域全体に静寂をもたらす」⁸ことにあった。ウクライナ領有をめぐるロシアとポーランド＝リトアニアとの紛争は、一旦はオーストリアの仲介(1656)で中止したが、1658年に戦争が再開したため、再度その仲介役として双方に講和を結ばせること、さらに、ロシアを反オスマン・トルコ陣営に参加させようとするのが派遣のねらいである。使節団の移動ルートと日程については以下に述べるが、特にバルト地域の移動に関して言えば、この地域が、上記の対ポーランドに加えてスウェーデンの圧力もあって不安定だったため、ルートの決定には多くの困難があったと考えられる。マイエルベルクの30年以前にモスクワへ向かったオレアリウスがリガを通過したのに対して、マイエルベルクが、バルト地域を1ヵ月余り旅したにもかかわらず、大都市リガに立ち寄らなかったのは、スウェーデン故の政情不安が理由だろう。

派遣目的であるモスクワの説得は約4ヵ月を要し、決裂しかけるものの、アレクセイは仲介を受け入れた。しかし、その一方、講和の準備をしていたポーランド王がオーストリアの介入を望まなかったことから、最終合意が得られず、マイエルベルク派遣の目的は果たされなかった。ちなみに、ポーランドとの和平は、三年に及ぶ交渉の結果結ばれたアンドルソヴォ講和(1667)により実現し、これによってロシアはスモレンスク、セヴェリア、全左岸ウクライナを獲得した。

⁶ Бодянский, 1874 : VI.

⁷ 同墓地には、ロシア旅行記の「大先輩」のヘルベルシュタインの墓もあるという(Аделунг, 1827 : 6)。

⁸ Путешествие, 1874 : 9.

使節団は、宮廷顧問官マイエルベルクと内務参事官ホラッツィ・ウィレルミ・カリヴッチ（イタリア人）を筆頭に、通訳ヤコフ・ヴィーバー、聖職者セヴァスチャン・グラヴィニク（グラヴィニチ）、秘書ミハイル・ガマー、絵師ヨハン・ルドルフ・シュトルン（シュトルノ、スエデン人か）とヨハン・ピューマンの2名、主馬頭、従者12名の合計20名⁹から構成されていた。当時のロシアにおける外交使節の扱いは、ロシアが外国へ派遣する際の随員数に準拠していた（大使随員は40-100名、公使15-30名）¹⁰ことからすれば、20名の使節団は公使レベルの待遇を受けるはずであるが、やはり神聖ローマ皇帝からの使者であることに配慮したためだろうか、モスクワならびに各地での迎え方には「大使」レベルの対応が見られた¹¹。一行のウィーン出発は1661年2月16日（新暦）である。

以下に、経由地をあげ、カッコ内に地名の別表記、判明した限りの到着・出発日と出来事を簡単に記しておく。

——ブロスラフ（ブレスラウ、2.18 発）／グニェズノ（2.28 着）／ビドゴシュチ／グダンスク（3.17 発）／（ビスワ渡河、ゲルマニアとサルマティアの境）／ケニヒスベルグ／メメル（現クライペダ、3.8 着、3.28 発、ここからジムヂ公国、セミガリア、スダヴィア、クロニア）／グルビン（現グロビニヤ、4.2 発）／シュルンデン（現スクルンダ）／フラウエンブルク（現サルドゥス）／ドブリン（現ドベレ）／アンネンブルク（現エンブルガ）／グロス・エカウ（現イェカヴァ）／ツェシス（4.13 着、セミガリアとの境、ロシア側付添役 И. А. Жериябшиский の出迎え）／コケンハウゼン（現コクネセ）／西ドヴィナ渡河（4.18、ロシアとの国境線）／セスヴェゲン（現セスヴァイネ）／マリエンブルグ（現アルクスネ、4.23 着、ロシア側通訳ラザリ・ツィムメルマン登場、А. Я. Олдин＝ナシショキンによる接待¹²）／ニエンフゼン（4.26 発）／（ペチョルィ修道院を経てモスクワ大公国内へ）／プスコフ（4.28 発）／ソリツィ（5.1 着）／イリメニ湖（5.5 着）／トルジョク（5.12 着）／トヴェリ（5.17 着）／チェルキゾヴォ（5.21 着）／ニコリスコエ（5.23 着、5.24 日午前11時頃にモスクワへ向けて移動）／モスクワ到着（5.24）／モスクワ入場（5.25）／ツァーリ謁見（5.27、レオポルドの1.11 付親書を渡す）／ツァーリと再度拝謁（5.30）／ロシア宮廷要人との面談（6.3、6.4）／モスクワ到着から四週間後にマイエルベルク発熱¹³（モスクワ滞在期に関しては具体的記述なし）／翌1662年になり、ロシア側の合意を受けてポーランドとの講和締結のためスモレンスクへ向かうことになる／宮中で歓談（4.24）／送別の宴（4. 25）／モスクワ発（5.3）／モジャイスク（5.8 着）／ヴァジマ（5.11 着）／ロシア・ポーランド国境（5.12）／ブラゴヴェシチェニエ（5.13）／ドロゴブジ（5.14）／スモレンスク（5.18 着、交渉不成功、9.8 発）／オルシャ（ヴィテプスク、9.12 着）／シクロフ（ポロツク、9.13 着）／モギリョフ（9.27 発）／ポリソフ（10.2）／ミンスク（10.5）／ヴィルナ（10.13）／リトアニア、プロイセン、ブランデンブルグ、シュレジエン、モラヴィ

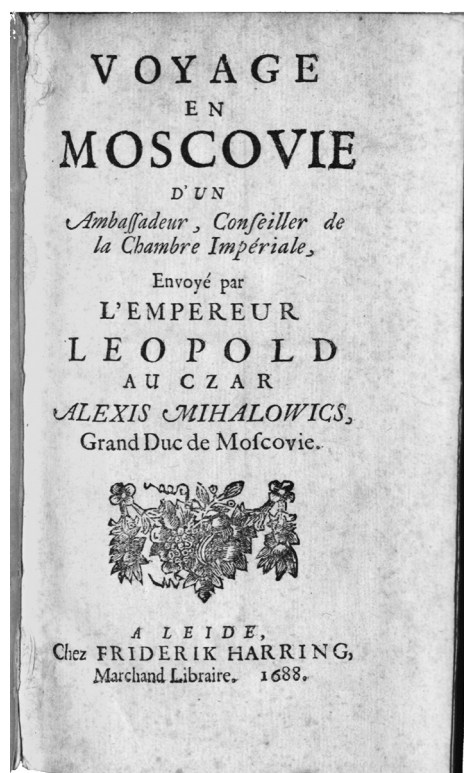
⁹ Путешествие, 1874: 10, 注3、ただし、絵師は「シュトルン、あるいはシュトルノ」のみ。

¹⁰ コトシーヒン, 2003: 90 ならびに注(2)。

¹¹ 神聖ローマ皇帝への対応規則に関しては、同じくコトシーヒンに詳しい（第5章、第16節）。扱いを大使 посол、公使 посланник のいずれとするか、については「混乱」もある。ロシア側文献の調査によれば、ツァーリの命令文書には「皇帝の大使 посол」との表記があるという（Путешествие, 1874: 32 注60）。マイエルベルク自身の言葉では「私は大使格であり、講和締結の全権を有する」。

¹² 見聞録本文には食事の詳細な記述がある（Путешествие, 1874: 35-37）。ただし、絵には描かれていない。

¹³ 当時、モスクワ宮廷で働く外国人医師は、エンゲリガルト、ハーゲンの他、『ロシアの現状』（1667）の著者サミュエル・コリンズ（彼のモスクワ在住は1659 - 1667）も滞在していた。



【図1】『モスコヴィアへの旅』
(1688、筆者所蔵)

アを經由してオーストリア領内へ／ウィーンへの帰還は1663年2月22日、全体で、ちょうど二年に及んだ長期の派遣となった。

マイエルベルクが帰国後に書き残した著作は、公式任務報告『皇帝への報告書』（1663年4月8日付）¹⁴ならびに『モスコヴィアへの旅』¹⁵の二点である（この他に、分量は少ないが、二種類の報告書¹⁶がある）。ここで記した移動ルートとスケジュールは後者の『旅』によった¹⁷。

『モスコヴィアへの旅』はマイエルベルクがラテン語で書き記した著作である。ただし、これがいつ書かれたのかに関しては現時点まで確証が得られない。むろん、帰国後であることは間違いないが、これまで1663、1664年、あるいは1679年などとされてきた（おそらく後者と思われるが、正確には不明）¹⁸。この原本を検証した歴史家O. M. ボヂャンスキイによれば、全体で236葉から構成され、表紙には年代も場所も記されていないことから、そもそも多数印刷の販売目的のものではなかったという¹⁹。我々が知りうる確実な『旅』の刊本は、1688年に出版されたフランス語訳（ライデンで刊行、381ページ、【図版1-2】）

がもっとも早く、イタリア語訳（1697）がそれに続く。

『旅』は全体として正確に日付順で書かれた日誌ではなく、ロシアの国情ならびに各土地の様子を記録し、やはり、報告を目的に書かれた上申書としての性格が強い。内容について例証するならば、——ルーシ・モスクワ国のリューリクの時代から現ツァーリのアレクセイまでの歴史概観、ドイツ、ポーランド、スウェーデン、プロイセン、サルマティア、ジムヂ、セミガ

¹⁴ 「1661年2月17日から1663年2月22日までモスコヴィアへ派遣されたマイエルンとガリヴッチによる上申書」 Relatio humillima Augustini de Meyern et Horatii Gulielmi Galvuccii, ablegatorum in Moschoviam ad. 17 Febr. 1661 usque ad d. 22 Febr. 1663. 刊行は1666年末とされるが、詳細不明。付録に1649年の「会議法典」ラテン語訳が掲載されて Wichmann (1820) に収録（未見）。ロシア語訳としては、「ロシアの観客」誌（1828、No. 3-6）に掲載されたドブロクロンスキイ訳、さらに、バルツフ訳（Донесение имп. Леопольду 1 о своем посольстве в Московию. М., 1882）がある。

¹⁵ Iter in Moschoviam A. De Mayerberg et H. Caulvucci, ab Imperatore Leopoldo ad Tzarem Alexium Mihailowiz anno MDCLXI ablegatorum.

¹⁶ "Relation der Kaiserl. Ablegation Augustin von Mayern und Horatius Wilhelm Calvucci uber ihre Reise nach Moscau und Empfang daselbst. Den 12 ten Juni 1661"(8枚), "Weitere Relation des Augustin von Mayern und Horatius Wilhelm Calvucci. Smolensk, den 27 Mai, 1662" (5枚)。

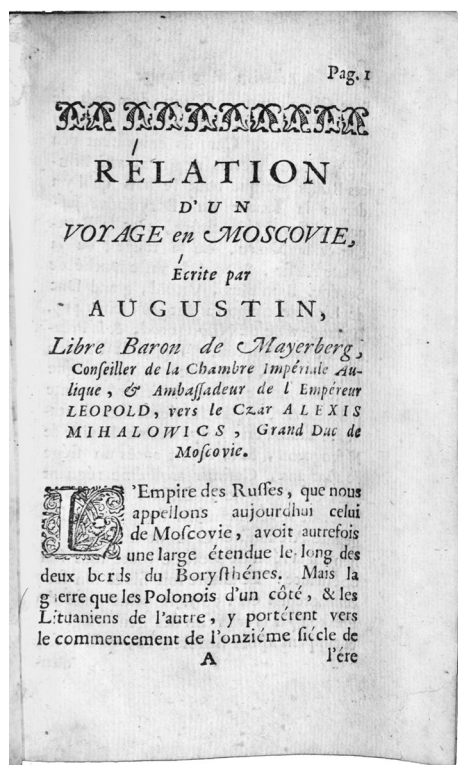
¹⁷ ロシア領内の移動については、以下に紹介する1903年版の画帖末尾に編者ロヴァギン作成のルート地図がある。バルト地域に関しては Grumblerr にルート地図が掲載。

¹⁸ ポーは1661年に「書かれた」とするが、これは間違いだろう。彼は『旅』の出版に関しては「Cologne?: s. n., 1679?」と記している（Poe, 2000: 246）。

¹⁹ Путешествие, 1874: II.

リア、クロニア、リヴォニア等々の周辺国・地方の現状・地誌・人物、ロシア各地の教会・主教座名、各位の聖職者、産物（例えば、琥珀）、通過地・町の歴史と現状、それらの土地の過去の統治者、地名の変遷、川や湖の名称とその変遷、川の場合は合流する川、さらに海へ注ぐまでの土地・町の列挙（例えば、西ドヴィナ川が合流するドニエプル川の通過地、ヴォルガ川の古代からの名称と流れる町）、復活祭宴会の食卓（不潔さ、酒・食事の内容等）、人物評価（アレクセイ帝をはじめ、ナシショキン、ロモダノフスキイ、ヒトロヴォ、ミロ斯拉フスキイ等貴族）、モスクワ市内で目にした様子、ツァーリー族・宮廷人・貴族はじめ人々の服装、調髪、馬車、拝謁時のあり様、宮廷内部・クレムリン内外の様子、寝床の硬軟、酒飲みをはじめとする気質・風俗・習慣、貧富、国家・社会状況、国内政治、モスクワ人の風俗・習慣、諸公国、キエフ、ヴラヂーミル、大ノヴゴロド、ヴォログダ、ウスチュク、ホルモゴルイ等々、多くの地方・公国²⁰の概要等。

このロシア見聞録をいかに読むかについては多くの議論が必要だが、一つの参考となるのは17世紀前半のロシアを詳細に観察・記述したオレアリウスのロシア見聞録²¹との比較だろう。彼もまた強い好奇心（しかも知的・学術的）とともにロシアを記述した。ロシアの国勢全体に目配りを怠ることなく、風習、婚礼や葬式、各種儀式、娯楽、衣食住、精神的特質を論じ、さらには、路上の人形芝居・大道芸人にも視線を向け、「女性の置かれた状況」にまで論及する。しかも、章立てをしていることから明らかに、マイエルベルクに比べて、全体がより整理・推敲され、体系的なロシア論となっている。マイエルベルクの記述には言及こそないものの、オレアリウスを熟読した上でロシアへ向かったことは間違いなく、明らかに後者からの引き写したと思われる箇所も見出すことができる。したがって、この二人の記述を対照させて論ずること（オレアリウスからの「借用」の指摘だけでなく、例えば、両者の記述における着眼点、「文体」等々の違い、訪問時期の違いからくるロシア社会の変容等々）は興味深い論点を数多くもたらすはずである。ただし、両者の比較・対照は本稿のテーマでないことから、今後の研究課題としたい。



【図2】 同前 第一ページ

²⁰ 名前があがっているのは、ドヴィナ地方、カザン、タタール、シベリア、スモレンスク公国、ヴォルィニヤ、ポドリア、ユゴリア、ヴァトカ、ボルガリア、ニジェゴロド公国、リャザニ公国、ポロツク公国、ロストフ公国、ヤロ斯拉ヴリ公国、ペロゼルスコエ公国、ウドリア地方（オブドリア・オビ川流域）、コンデニア、ヴィテプスク公国、ムスチスラフ公国。

²¹ オレアリウス旅行記の翻訳・研究史に関しては、ここでは述べてない。近年のロシア語版の刊行は1996年だが、2006年にスヴォーリン社が刊行したものの再版。さらにスモレンスク版（2003）があるが、これもロビヤギン訳1906年版の再版と思われる（未見）。

ロシアでマイエルベルク見聞録の存在に注目したのは²²、19世紀前半に活躍した歴史家Ф. П. アデルンクである²³。ドイツ生まれのポリグロトとして彼は19世紀初頭からロシアで優れた言語学者・歴史学者として目覚ましい活動を行うが、旅行記研究に関する大きな成果は『外国人によるロシア旅行記書誌』(1846、ドイツ語。ロシア語訳は1864年刊行、デミドフ賞受賞)²⁴である。この書誌の編纂過程でマイエルベルクがアデルンクの視野に入ったのは当然で、彼によってマイエルベルク研究の幕が文字通り切って落とされたのである。その著作が、1827年に刊行された『マイエルベルク男爵と彼のロシア旅行、風景・儀礼・肖像画等々の絵を添付』(ロシア語ならびにドイツ語で同時に刊行)である。その内容目次は、——(1)マイエルベルクに関する伝記情報、(2)マイエルベルクの旅行とその目的、(3)モスクワ滞在と交渉、(4)自身の旅行に関するマイエルベルクの上申、(5)マイエルベルク男爵のロシア旅行の絵の解説、付録として『日本誌』の著者E. ケンペルのモスクワ日記手稿抜粋²⁵(全372ページ)。

『皇帝への報告書』と『モスコヴィアへの旅』のロシア語全訳はさらに半世紀を待たねばならないが(「ロシア見聞録」のロシア語訳に関しては、19世紀前半に部分的紹介がされ、完全訳が1873-1874年にモスクワ大学付属ロシア歴史・古代協会「資料読本」に掲載、同1874年に単行本として刊行された。訳者A. M. シェミヤキン、O. M. ボヂャンスキイの序文)²⁶、アデルンクの著作によってマイエルベルクのロシア派遣の具体と、見聞録を含めた著作の全体像が明らかになったと言える。

アデルンクの著作で着目したいのは、上記目次(5)が200ページを越えている点である。ここで言及された絵とは何か。使節団は絵師2名を同行させ(オレアリウスの場合も同様で、当時の外交使節の常道だった)、彼らが描いたスケッチ250点(オリジナルは彩色)がアルバムにまとめられ、皇帝に見聞録を献上した際に添付されたものと思われる。ただし、この画帖が複数部出版された形跡は見られない。画帖の存在が知られる契機に関しては、アデルンクの上掲著作の序文に記されている。それによれば、彼は、ロシア中世史に関してどのような文献がドレスデン王立図書館に収蔵されているかを知るためH. П. ルミャンツェフ伯爵(1807-1814

²² ロシアにおいてマイエルベルク旅行記はいつから関心の対象となったのだろうか。収蔵の歴史でもっとも早期と考えられるのは18世紀前半、具体的には、優れたヨーロッパ通で、有数の蔵書家として知られるドミトリイ・ゴリツィン(1663-1737、ピョートル期に大膽職の一人としてイタリアへ派遣され、主税局長を務め、アンナ帝期にはオリガルヒ統治を謀るも失敗し、投獄されたシュリセリブルクで死去)がボッセヴィノ、オレアリウスらの旅行記とともにマイエルベルクの書を所有していた。ただし、その書誌データは1661年と記されているため、いかなる版かは不明(Луппов, 1973: 218)。

²³ Friedrich Adelung 1768年にシュテットリン(現ポーランド、シュチェチン)で生まれ、ライプチヒ大学卒業後1794年にロシアへ、ミタウ(現エルガウ、ラトビア)、ペテルブルクで勤務、ニコライ、ミハイル両大公の傳育官(1803-)、外務省の特別任務官(1818-)、アジア部門東方言語研究所長。ニコライ・ルミャンツェフのサークルメンバーとしてルミャンツェフ・ミュージアム創設に参加。編著として『サンスクリット文献書誌』(1830)、『すべての言語と言葉の比較辞典』(1815)他。1843年ペテルブルクで死去。息子はグリボエードフとともにテヘランで殺害され、娘はロシア最初の『ヨーロッパ・ロシア民族地図』(1851)の編纂で知られるП. И. ケッペン(気候学者ケッペンの父親)に嫁ぐ。

²⁴ Adelung, 1846.

²⁵ 1683年の2ヵ月に及ぶモスクワ滞在の体験を詳細に記した日記へのアデルンクの序文(321-328)、日記(7月5日-9月5日まで)のロシア語訳(329-366)、Fragmenta Notitiarum Russiaeと題された文章からの抜粋4点(367-370)、さらにアデルンクの解説と簡単な注釈が添えられている(-372)。ケンペルはロシアの二人の共同統治帝、後のピョートル大帝とイヴァン5世に謁見している。

²⁶ Путешествие, 1874.

年に外務大臣、1810-1812年に国家評議会議長）に協力を求め、要請に従って調査を行った図書館司書エーベルト氏からこの画帖の存在（一冊 131 葉、原画 250 点）²⁷ が知らされたという。アデルンクはそれを実際に調査し、その価値を確認し、出版したい旨をルミャンツェフに報告する。彼は全面的に支援を約束したものの、1826年に死去、彼に替わって弟セルゲイ・ルミャンツェフの協力を得て、画帖は、1827年に上記著作の別冊として刊行された（『1661-1662年のローマ皇帝使節マイエルベルク男爵のロシア旅行の絵—風景、民族習慣、衣装、肖像画等』136ページ）。複製本は、原物をドレスデンの画家が「忠実に模写」し、そのコピーをベテルブルクでリトグラフ版とする形で出版された（白黒刷り）。これは、スケッチの一点毎に、絵下部に書かれたドイツ語による説明のロシア語訳に加えて、コメンタリーを付したものであり、コメンタリーの詳細さは、旅行記本文にも増して画帖に大きな関心が払われていることを示す十分な証拠である。彼は、スケッチとの出会いを「私がこの仕事に向かった第一の理由」と告白している²⁸。

3.

アデルンクのマイエルベルク・アルバムへの眼差しを正面から受け止め、敢えてオリジナル画帖の現物に立ち戻ってそれを検証し直す仕事が行われ、その成果が20世紀初頭に世に出た。1903年にスヴォーリン社から刊行された『マイエルベルグのアルバム 17世紀ロシアの風景と習俗画—Ф. アデルンクによる絵の説明注釈を A. M. ロヴァギンが再検討・補足』である。本体は、複製スケッチによる大型アルバム（縦 40cm×横 50.7cm、63 枚と地図、折込ページあり【図版 3】）、ならびに注釈本（189 ページ）の全二冊からなっている。ここには見聞録の文字テキストは収録されず、スケッチのみを複製した仕事である。画帖を再度調査した編著者 A. M. ロヴァギン²⁹ は、アデルンク版の絵が原画とかなりかけ離れていることに気付く。また、アデルンクが付した注釈が詳細で、参考となる箇所が多いにもかかわらず、不足部分も多く、加筆・修正を加えたのである。その意味でロヴァギンの仕事は、文字通りアデルンクのマイエルベルク研究に踏まえながら、それを前進させた批判的継承とでも呼べるものである。

アデルンク版との差異はどこにあるのか。第一は、絵の再生技術が進歩したことで、画帖の規模が大きくなったことである。すなわち、アデルンク版は、上記のとおり、ドレスデンの画家の模写をベテルブルグでリトグラフ印刷したもので、各ページに絵が数枚ずつバランス良く配列してある（全 64 ページ）。一方、原画を写真撮影し、原寸大でそのまま収録することを編集方針とするロヴァギン版では、各ページに何枚かの絵があればそのまま再現・掲載している（ただし、白黒）。両者の差異の第二は、絵の選択基準・配列である。選択基準に関する違い（そ

²⁷ オリジナル・タイトルは、Pictura itineris legatorum S. C. M. Leopoldi M. Augustini de Mayern et Wilhelmi Calvucci ad Russorum Imperatorem Alexium Michaelowicz. Jussu Dn. De Mayern a pictore aulico studio confesta. Unicum in orde exemplar. ドレスデン王立図書館の他、ラトヴィアの民族学者 C. Я. ツィメルマニスによれば、モスクワ歴史博物館（旧モスクワ史・再建博物館）に収蔵という（未確認）。

²⁸ Аделунг, 1827: VI.

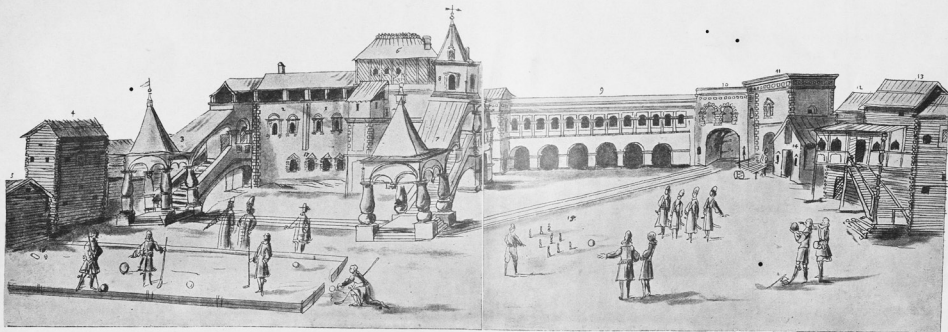
²⁹ 1870年にレヴェリ（現タリン）に生まれ、ベテルブルク大学歴史文献学部を卒業、「ロシア書誌学協会」長、ベテルブルク大学他で歴史地理学、郷土学書誌を研究・講義、同大学図書館長を歴任した。マイエルベルク・アルバムの編纂の他、オレアリウス旅行記の翻訳、オランダ人ヴィッセン旅行記の研究、主著『書籍学の基礎』（1926）等で知られる。

АЛЬБОМЪ МЕЙЕРБЕРГА

ВИДЫ И БЫТОВЫЯ КАРТИНЫ РОССИИ XVII ВѢКА

РИСУНКИ ДРЕЗДЕНСКАГО АЛЬБОМА, ВОСПРОИЗВЕДЕННЫЕ СЪ ПОДЛИННИКА ВЪ НАТУРАЛЬНУЮ ВЕЛИЧИНУ,

СЪ ПРИЛОЖЕНІЕМЪ КАРТЫ ПУТИ ЦЕСАРСКАГО ПОСОЛЬСТВА 1661—62 гг.



Видъ посольскаго двора въ Китай-городѣ въ Москвѣ.

Издание А. С. Суворина
1903

【図3】ロヴァギン編集アルバム（1903、筆者所蔵）

の具体については後述のリストを参照）は、両編者の時代が70年以上も隔たっていることに関連し、それぞれの時代の「ロシア」と「周辺」に対する認識の変化が反映されている。配列を見ると、アデルンク版ではオリジナル250点から「クルランディア、リフランディア、ロシアに直接関連のないものを除いた」128点が選択され、大まかには使節団の移動の順序で配列される——クルランディアの風景（1-5、数字は葉・ページ）、リフランディア（5-7）、ロシア（7-32）、モスクワ滞在（33-64）³⁰。一方、ロヴァギン版は、アデルンク版で選択されなかった1、8、21、23、33、89を収録だけでなく、選択した140点をロシア関連に重点を置いて配列する。すなわち「アレクセイ・ミハイロヴィチ帝時代のロシアに直接関係する絵」（1-89）、「ジムヂ、クルランディア、リフランディアの風景」（90-130）、「ポーランドとプロイセンの都市」（131-140）の順である。使節団の具体的移動を必ずしも反映していない形となったのは、ロシアの部分がやはり点数も多く、派遣の主要目的がモスクワにあったことからやむを得ないとしても、19世紀末－20世紀初頭におけるロシア帝国像とナショナリズムの影があることは認めざるをえない。

ロヴァギン編集の画帖の目次をあげる（【 】内はアデルンク編画帖の番号）。

1. アルバム表紙【アデルンク（以下 Ad）なし】
2. ドミトリイ皇子の町（コケンハウゼン）

³⁰ 数字が一部重なるのは同一ページに絵が複数収録されているため。

【Ad 6-1】 3. マリエンブルグあるいはアルイスト 【Ad 8-1】 4. ペチョルイ 【Ad 8-2】 5.
 モスクワ市紋章 6. プスコフ・ベチェルスキイの修道僧 【Ad 9-1】 7. ペチ 【Ad 9-2】 8.
 プスコフ市の旧紋章 9. プスコフ 【Ad 10】 10. クリャボヴォ 【Ad 11-1】 11. ゴルキ 【Ad
 11 - 2】 12. ドゥブロヴナ 【Ad 12-1】 13. オポキ 【Ad 12-2】 14. シトナ川 【Ad 13-1】
 15. ソリツァ 【Ad 13-1】 16. ゴリノ 【Ad 14-1】 17. トロイツァ修道院 【Ad 14-2】 18. 大
 ノヴゴロド 【Ad 15-1】 19. ノヴォロク集落 【Ad 15-2】 20. ノヴゴロド市紋章 【Ad 15-3】
 21. ノヴゴロド市の別の紋章 22. ポネデリエ修道院 【Ad 16】 23. クラスナヤ 24. ザ
 イツェヴォ 【Ad 17-1】 25. ヴィナ 【Ad 17-2】 26. モシニャ川 【Ad 18-1】 27. クレスツイ
 【Ad 18-2】 28. ラヒノ 【Ad 19-1】 29. ヤジェルビツイ 【Ad 19-2】 30. イヴェルスキイ(ヴァ
 ルダイ) 修道院 【Ad 20-1】 31. ジモゴリエ 【Ad 20-2】 32. エドロヴォ 【Ad 21-1】 33. ク
 ジェンカ 34. コロムナ 【Ad 21-2】 35. シリナ川 【Ad 22-1】 36. ヴィシニイ・ヴォロチョ
 ク 【Ad 22-2】 37. ホロホリニャ 【Ad 23-1】 38. ブドヴォ 【Ad 23-2】 39. トヴェリ市紋章
 【Ad 26-1】 40. トルジョク 【Ad 24】 41. メドノエ 【Ad 25】 42. トヴェリ 【Ad 27】 43.
 ボゴロデツコエ 【Ad 26-2】 44. ゴロドニャ 【Ad 27-1】 45. ショシャ川 【Ad 28-2】 46. ス
 パス・ザウルキ 【Ad 29-1】 47. クリン 【Ad 29-2】 48. モシニツイ 【Ad 30-1】 49. ベシキ 【Ad
 30-2】 50. チャシニコヴォ 【Ad 31-1】 51. チェルキゾヴォ 【Ad 31-2】 52. ニコリスコエ 【Ad
 32】 53. 使節団到着 【Ad 33】 54. 使節団引見 【Ad 34】 55. 東側から見たクレムリン 【Ad
 35】 56. 西側から見たクレムリン 【Ad 36】 57. 聖職者の衣装 【Ad 37】 58. ロシアならび
 に他民族の男性衣装 【Ad 38】 59. 女性衣装 【Ad 39】 60. ロシアならびに他民族の男性衣
 装と女性衣装 【Ad 39】 61. チェトヴェルチと再鑄造されたターレル 【Ad 40】 62. モスク
 ワの様々な貨幣 【Ad 40】 63. 使節迎賓館中庭 【Ad 41】 64. 大鐘 【Ad 42】 65. 聖母のイ
 コン 【Ad 43】 66. ツァーリの紋章 【Ad 44-1】 67. ヴラデーミル公と“公とツァーリ一覽”
 【Ad 44-2】 68. 府主教ピチリム 【Ad 45】 69. 大修道院長用箱馬車 【Ad 46】 70. 貴族用箱
 馬車 【Ad 47】 71. 后用箱馬車 【Ad 48】 72. 櫓で出立するツァーリ 【Ad 49】 73. ロバに
 よる行進 【Ad 50】 74. モスクワ全景 【Ad 51】 75. ドイツ人村 【Ad 52】 76. シロハヤブ
 サ 【Ad 53】 77. ツァーリの宮殿にて 【Ad 54】 78. 后と皇子の外出 【Ad 55】 79. 後の外
 出 【Ad 56】 80. アレクセイ・ミハイロヴィチ帝 【Ad 57】 81. マリア・イリイチナ后 【Ad
 58】 82. 祭服の総主教ニコン 【Ad 59】 83. 日常服の総主教ニコン 【Ad 60】 84. 嘆願 【Ad
 61-1】 85. リヴォニアからの移住民 【Ad 61-2】 86. 埋葬 【Ad 62】 87. モスクワ図 (1-49
 の番号説明付) 【Ad 63】 88. スパス門の時計 【Ad 64】 89. ロシア語アルファベット 【以下
 Ad はなし】 90-130. ジムヂ、クルランディア、リフランディアの風景〔ロビヤギン目次はこ
 れのみの記載だが、以下にその詳細を記すと、90. サモギチアあるいはジムヂ紋章 91. クル
 ランディア公国紋章 92. リフランディア公国紋章 93. ポランゲン 【Ad 1-1】 94. 聖アア
 川とリトアニアのサモギチアの村 95. 聖アア川 96. ルツァウ 97. オベル・バルタウ川
 98. オベル・バルタウ 99. グルビン 【Ad 1-2】 100. テデリンケン 101. テデリンケン川
 102. パデルン 103. シュルンデン 【Ad 2-1】 104. フ라우エンブルク 【Ad 2-2】 105. シュ
 ヴァルト 【Ad 3-1】 106. アウツェン湖 【Ad 3-2】 107. アウツェン川 (セミガリアの始まり)
 108. ポグケイン 109. ド布林 (ベルシュバッハ) 【Ad 4-1】 110. グリュンゴフ 【Ad 4-2】
 111. シュヴェト川 112. プラトン川 113. ヴィルツァウ川 114. セサウ川 115. シュヴィ
 テン 116. アンネンブルク、アア川 【Ad 5-1】 117. グロス・エカウ 【Ad 5-2】 118. ミス川、
 ズリク 119. ネイグト 120. アルトヴァリゴフ 121. ゼエレン 122. ツェツェン (クルラ

ンディアが終わり、ドヴィナ川向こうからリフランドが始まる) 123. エテリ 124. ベルズン 125. セスヴェゲン【Ad 5-3】 126. 森の中の川 127. チルゼン(現チルザ) 128. ツェリチン【Ad 7-1】 129. ニエンガウゼン(リフランドの最端)【Ad 7-2】 130. イヴァン・ヴァシリエヴィチ大公墓碑。同じくロヴァギン版目次には「131-140. ポーランド、プロイセンの町」の記載のみだが、詳細は以下の通り。131. シレジアの首都プロツラフ 132. ポーランド王国紋章 133. ブイドゴスツあるいはブロンベルク 134. グネズノ 135. グダニスク 136. ケニヒスベルク 137. ピラウ 138. 同要塞 139. プロイセン公国紋章 140. メメリ]

スケッチ全 140 点に描かれた画題の内訳は、ロシア関連 87 点、西リトアニア 4 点、ラトビア 37 点 (クルゼメとゼムガレ 28、ヴィドゼメ 9)、エストニア 2 点、ポーランドとプロイセン 10 点となる³¹。ただしこれは現在の民族・国家の線引きによるものであり、マイエルベルクの時期の認識とは異なっている。ロシア国境の線引きに関しては以下で言及する。また特に、当時のバルト地域が、政治・支配のレベルではスウェーデン、ポーランド、ロシアが激しく交錯しながら、文化レベルでは、バルト地域それぞれのネイティブ文化を基層としながら、ゲルマン、スラヴ文化が複雑に重層化していたことは十分考慮しておく必要がある。

4.

ロヴァギン編の画帖に収録されたスケッチに着目した研究は、管見の限り何点かある³²。いずれも民族学の物質文化研究の観点から、農村風景の中に描かれた建物 (特に農家の母屋ならびにその他の各種小屋)、集落、輸送手段・荷馬車に着目する。資料の少ない 17 世紀ロシアとバルト地域の文化を知る貴重な資料として入念な分析を加えていて、多くの示唆を得るが、ここでそれらの内容を検討する紙幅はない。その他、注目すべき現象としては、住居・教会 (木造建築)、移動手段、宮廷・日常生活、都市・モスクワ、階層・身分・服装・宮廷人、軍人・武器、貨幣、広場の遊び・祝祭・儀礼・行列・行進、宮中インテリア、肖像画 (皇帝他)、文字、シンボル (表象) 等々が考えられる。それらをさらに点検することで、画帖の資料的価値を再考すること、言い換えれば、スケッチの細部に広義の図像学的コメントを付すことを通して、アルバムをロシア・バルト文化記述のためのテキストとして再構築することが求められる。必要なのは、マイエルベルクの画帖を「一つの全体」として捉えることである。以下、そのた

³¹ Цимерманис, 1968 : 3.

³² Громов, 1955 ; Цимерманис, 1968 ; Цимерманис и Моркунас, 1980. ただし Цимерманис, 1970 は未見。最初のグロモフ論文は、マイエルベルクのアルバムに描かれた農民の家屋を綿密に調査し、通常、北ロシアに多く見られる農家の一階部分が絵に描かれていないこと、これもロシアの農家には必ずと言ってよいほど備わっている入口を入ってすぐに広がる部分 (セーニ・玄関の間) が描かれていないことの二点を分析結果とする。その説明として、現在、民族学で一般的な農家構造よりも時代的に以前、特にセーニ出現以前のものであり、また、北方タイプではなく南方タイプであるのではないかとしている。また、この地域で 19 世紀農家のタイプが形成されたのは、マエルベルク後の 17 世紀末から 18 世紀初頭のことではないかとする。その他、村落内の家屋の配列として、一列、二列の二タイプがあること、母屋以外の仕事小屋の存在の確認、母屋との位置関係として T タイプ、Г タイプ、絵から想定しうる中庭の形と位置、それぞれにつき、詳細に点検し具体的数を示しており、説得力に富む。後者ツィメルマンニス論文では、集落・農家、建物 (穀物小屋、風呂小屋、夏台所等)、荷馬車等に着目して 17 世紀のラトヴィア地域の物質文化の事例として検証する他、ドイツ風屋敷の存在も指摘する。

めの準備作業として、ロヴァギン版の画帖からいくつかの事例を選んで検討してみる。

(1) 「使節団長と絵師」(No. 1 【図版 4】)

中央に聳える柱の上下二ヶ所のスペース、さらに柱の下に記されたラテン語は、それぞれ「神聖ローマ皇帝レオポルトの使節アウグスト・フォン・マイエルンならびにウイルヘルム・カリブッチのロシアのツァーリたるアレクセイ・ミハイロヴィチへの旅の絵」「フォン・マイエルン氏の命で宮廷画家の尽力によって作成された」「世界にただ一冊」と読める。柱右の人物は、書類を持つことから、おそらくマイエルベルクその人と思われる。彼は No. 54、77 【図版 16】にも登場するが、衣装ならびに所作の描かれ方から使節の代表者と見える。柱の左に立つ人物は、手にしているパレットと筆から絵師である。先に記したとおり、この訪問にはシュトルンとピューマンという二人の絵師が同行しているからそのいずれかだろうが、No. 77 に前者の名前が説明に付され、No. 56 に署名 (I. R. S. D. – Iohann Rudolph Storn descripsit) が読めることから、タイトルページに登場したのはシュトルンと考えてよい。また、「世界に一冊」の表記から、このアルバムが複数出版されなかったことが改めて分かる。

(2) 「出迎え」(No. 2 【図版 5】)

西ドヴィナ川岸の町コケンハウゼンでロシア側が使節一行を迎える場面である。川向こう左の建物はロシア風とは見えず、しかも要塞と思われるが、一部破壊されているようにも見える。中央左に遠く見える教会は尖塔十字架の形状からはロシアの教会ではないのではないかと。実は、ロシアがどこで使節を迎え入れるかは大きな問題であった。見聞録に見る限り、公式の迎え入れは、国境の村ベチョルィを越えたプスコフにおいてだが、それより西のコケンハウゼン、そしてマリエンブルクでもロシア側は使節団を迎えている。

絵の下の説明によれば、この町はリフランドにあり、リガから 12 マイル、ツェツェンから 1.5 マイルの距離の地点にある。使節を迎えた付添役 пристав, Commissarium の貴族イヴァン・ジェリャブジスキ³³ (モスクワまで同行) を先頭とした約 120 名からなる「十分に軍装を整えた」銃兵が宿へと導いたこと、そして、この町が実は「最近のポーランドとの戦争でモスクワがスウェーデンから奪った」ものであることが記されている。1656-1658 年に続いたロシアとスウェーデンとの戦いで、ロシアがスウェーデンから占領したのが 1656 年 8 月 14 日のこと、1658 年 12 月 20 日のヴァリエサリ条約で三年間の休戦が決まり、この地域はロシアの支配下に置かれた。コケンハウゼンの名も「皇子ドミトリイの町」と改名された。この当時、この地域は支配者が始終変更する、きわめて不穏な状況下にあったからこそ、20 名の「客人」に 120 名もの護衛が付いて一行を宿舎まで送ったのだろう。さらに、ここから東に進んだマリエンブルクでは同じく貴族のアファナシイ・オルディン＝ナシショキンが待ち構えていた。リフランド軍司令官であった彼はわざわざデルプトから使節団を迎えるべく到来し、モスクワ暦に従った復活祭 (旧暦 4 月 13 日) に重なったこともあって盛大な宴席を準備したのである。1661 年 6 月 12 日のカルディス条約によって、マリエンブルク、コケンハウゼンを含むリヴォニア、エストニアの諸都市は再びスウェーデン領となった。

送迎ならびに警護は国家の存在を誇示するための重要な儀式であった。

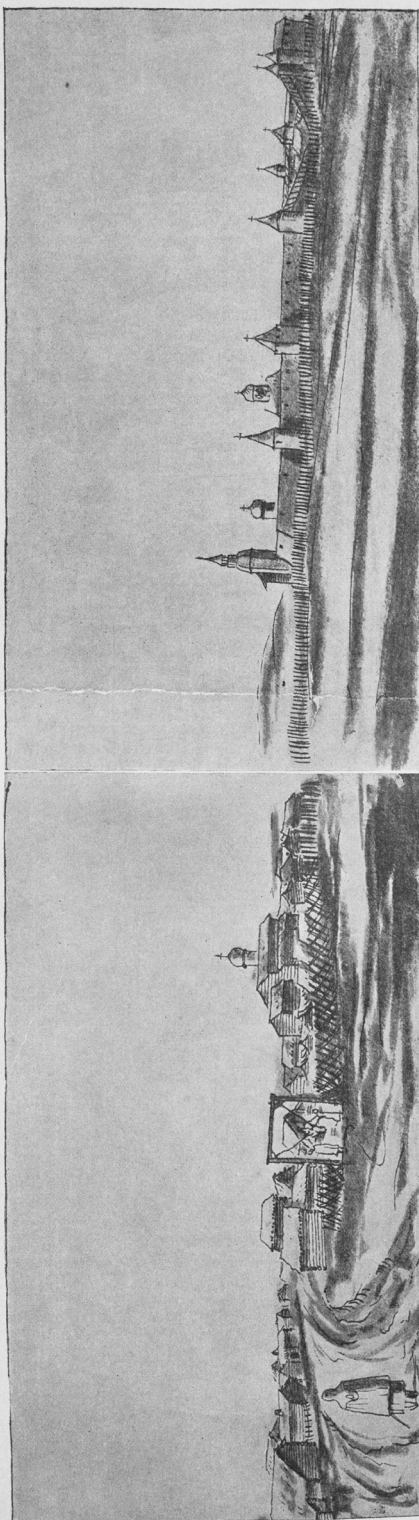
³³ 1638 年生まれ、1668 年にウィーン大使、1676 年からドゥーマ士族、1684 年から宮廷官 (Путешествие, 1874 : 30 注 45)。



【図 4】 同前 No.1 表紙

[illegible]

【図5】 同前 No.2 ドミトリイ皇子の町（コケンハウゼン）



Diese hat ein Kloster und Hadeln in Huesz Kusstand dem Bistrossen in Huesz
 kriessen, müssen aber die Soldaten unterhalten und der Herrschaft dient betreffen
 zuvor die grenze Kusstandes anfang und steiffen sich endigt. Hieszu heissen in
 Huesz, deder grenze Kusstandes aus einem baum entworfen dabey gebracht heilig geest wird
 getrieben. Eine Wundt muß von Huesz an der Huesz heil ein Kloster heissen gemacht, also ein
 angelegter Mann, ist in diesem in der Hiesigkeit und nach dem Kloster heil Hiesigkeit haben
 Kloster der Hiesigkeit Hiesigkeit. Diese sind an dem nach dem Kloster heil Hiesigkeit haben
 Kloster der Hiesigkeit Hiesigkeit. Diese sind an dem nach dem Kloster heil Hiesigkeit haben

【図6】 同前 No.4 ペチヨルイ

(3)「ブランコ、町入口」(No. 4 【図版 6】)

プスコフの西 70kmにあるペチョルイの全景である。絵の下にびっしりと書き添えられた説明は詳しい。「ペチョルイ、ペーラヤ・ロシアの修道院と町、モスクワ大公に所属」という何気ない冒頭の文章も、ここが 1660 年代当時、どのような政治状況下にあったかを考えると多くの問題が見えてくる。マイエルベルク自身も、先の文のしばらく後に「ここは我々を迎えた最初の国境の町であり、あと 1 マイルでロシアとリフランドの境である」と書くが、それだけではなく、クルランド、リヴォニア、スウェーデン、ポーランドが交錯し合う最前線だった。マイエルベルクは続いて、ペチョルイという地名の語源が「聖地あるいは聖母マリアの埋葬場所」として、名前の連想からキエフ・ペチェルスキ修道院の歴史概略と現状へと筆を進めている。おそらく、旅行者が現地でそれを講義されたのか、あるいは文献でこのキエフの著名な修道院について調べたのであろう。左全景に杖を手にした修道僧が描かれていることも関連する。絵師の主題が町と修道院、僧にあることは明らかである。ロヴァギンは地名の語源について「プスコフ=ペチェルスキの最初の僧たちはカメンヌイ川岸の洞窟に住んでいた」と記すが、いずれにしても洞窟（пещера）が墓所ならびに聖なる居住空間として崇拝されていたことに変わりはない。一つ残念なことは、マイエルベルクが複数描かれた修道院と教会の名前を記載していないことである。



【図 7】 同前 No.4 部分 女性のブランコ乗り

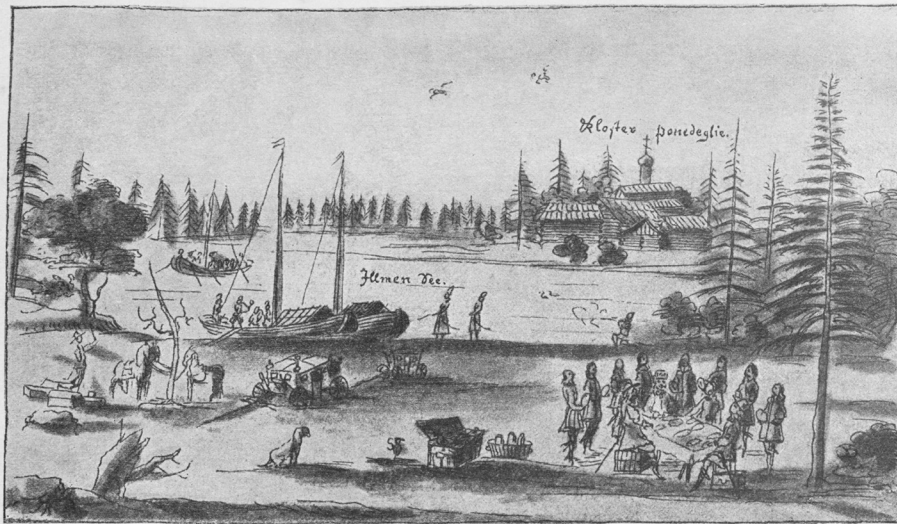
ロヴァギンのコメントリー（アデルンクはなし）は、全体として、マイエルベルクの説明に影響され、修道院の記述に終始するが、本稿筆者が着目したいのは、左中央の町入口に建てられ、三人の女性が興ずるブランコである【図版 7】。これが 17 世紀後半のロシアでブランコ遊びが行われていたことの貴重な証拠であることは、これまで何人ものソ連の民族（俗）学者によって指摘されたが、いずれも挿絵として添えられたものでしかない³⁴。本稿筆者は、これが町の入口・境界に、しかも復活祭の時期に設営されたことに大きな意味があることを別にすでに指摘した³⁵ので繰り返さない。ちなみに、当時、町の入口がここに描かれたように、木造の門形式で作られていたことが、同じく画帖の No. 33、44 から分かる。

(4)「道中の食卓」(No. 22 【図版 8】)

画帖で容易に気付くのは、大小さまざまな川や湖が多く、それゆえ使節団が多くの場合に、軽便な筏でその水系を渡り、荷物を運ぶ光景が多く描かれていることである。これもそうした場面の一つで、ノヴゴロドの東 24 露里に位置するナヴォロクのボネデリエ=ニコラ修道院とイリメニ湖である。絵の説明には記述がないが、手前で食卓を囲むのが使節団一行であり、4 名が坐っている。画帖全体には、食事の場面がまったくない。すでに通過したマリエンブル

³⁴ 例えば、Рабинович, 1978 :

³⁵ 坂内, 1991 : 144-145.



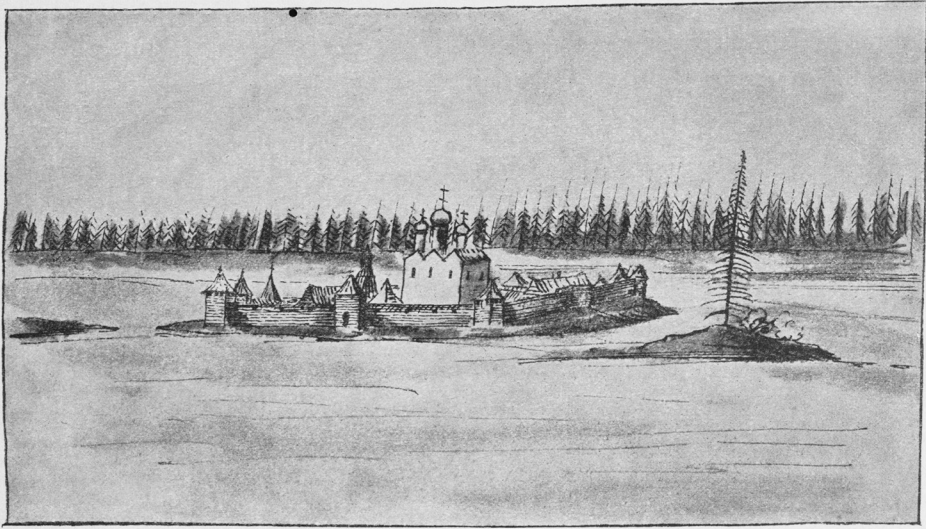
Sie haben nur nicht weit von einem Kloster Ponedeglie, worinnen nur drey Mönche sind, unsere Sachen im Walde, eine Meile von Masnoloff, aus den Bäumen ans Land gesetzt, zu Mittag gegeben und frische Pferde bekommen.

【図8】 同前 No.22 ノヴゴロド東ポネデリエ修道院

クでナシショキンが復活祭の実に豪華な食卓を用意したこと、その詳細なメニューの内訳とマナーを初めとした食事の様子は『見聞録』本文に詳細に記されているし、宮中でツァーリ主催の送別の宴が開かれたことも『見聞録』に読めるものの、スケッチに描かれることは皆無である。食事の場面を再現することは、そもそも「常識」に反していたのだろうか。

(5)「避難所、戦さの傷跡」(No. 30 【図版9】)

絵の下の説明には、『見聞録』本文には言及が見られない事実が読める。「大きな湖の中にあるヴァルダイ修道院はモスクワの現総主教ニコンが建立し、石壁で強固なものとされた。カトリック僧 120 名と、現戦争の捕虜ならびに運ばれてきた人々がここに暮らしている」。ニコンは 1652 年 7 月に総主教座に就任後ただちに、ヴァルダイ湖の中島に男子修道院を建立したい旨をレクセイ帝に申し出て許可を受け、翌年夏に建設に着手、秋には木造教会二つが完成し、同時に石造建物の建設も開始した。絵に描かれている寺院は、1656 年 12 月に聖別された石造のウスペンスキイ大寺院であろう。カトリックの僧に関する言及はいささか唐突の感があるが、ここは早くから、ユニアート（東方帰一）派からの圧力を受けて逃れてきたベラルーシのオルシャ・クティン修道院の僧をはじめ、ウクライナやリトアニアからの避難民のアジールとなっていた。その詳しい事情がマイエルベルクにまで伝わることはなかったはずだから、こうした記述となったのだろう。さらに、宗教施設が戦争捕虜の収容所として使用されていたことが絵の説明から分かる。ポーランドならびにスエウェーデンとの度重なる戦争の傷跡は、こうした人里離れた土地にある格式の高い修道院にまで及んでいた。



Das Kloster Waldey mitten in einer stehenden großen See wird bewohnt von hundert und zwanzig Catholischen Mönchen welche in unendlichen Kriegen gefangen daselbst hinein gebracht worden sind, ist von dem jetzigen Muscovitischen Patriarchen Nikon erbauet und mit einer steinern mauer befestiget, liegt vier meilen von Jaskolbiza. Gegen über ist der Marchtfleeh Waldey, wodurch wir gefahren.

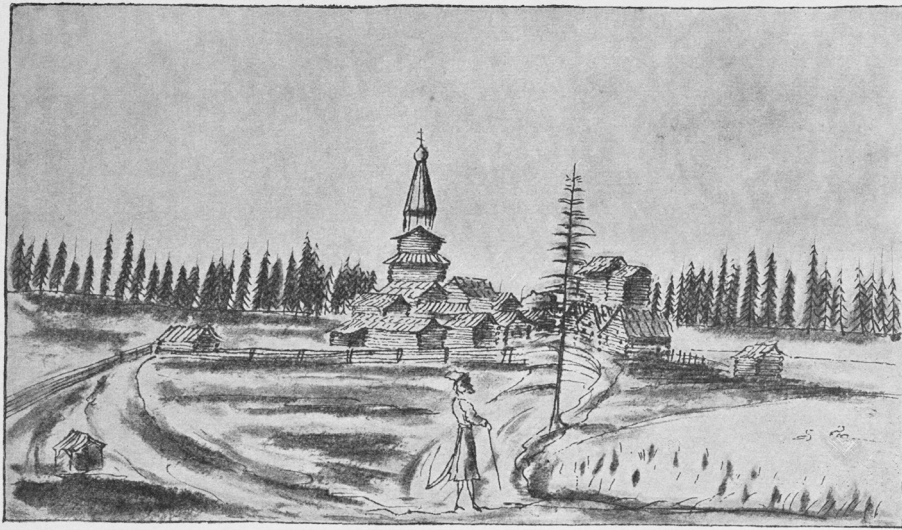
【図9】 同前 No.30 ヴァルダイ・イヴェルススキ修道院

ここで想起されるのは、18世紀後半にペテルブルクからモスクワへの街道を駆け抜けて『ペテルブルクからモスクワへの旅』（1790）を書いたA. H. ラヂシチェフである。彼は、ヴァルダイの町の記述の冒頭を「新しいこの町は、アレクセイ帝の時代に捕虜となったポーランド人が住み着いたと言われている」と記した後、中の島に立つ修道院にも言及する。そしてこの修道院との連想から、娘との恋に身を捧げた修道僧について語り、さらには、この土地の湯女とも思しき娘たちの姿と風習をいささか冷淡に、非難を込めて記している³⁶。

（6）「モスクワへ向けて」（No. 24、27、29、31、32、34、36、40、41、42、44、47、49）

ノヴゴロドを出立すると、前項のヴァルダイ、ザイツェヴォ、クレスツイ、ヤジェルビツイ、ジモゴリエ、エドロヴォ、コロムナ、ゴロドニヤ、ヴィシニイ・ヴォロチョク、トルジョク、メドノエ、トヴェリ、ゴロドニヤ、クリン、ペシキは、いずれもモスクワへはほぼ一直線に通ずる街道（当然ながら、未だペテルブルクは建設されていない）沿いの町や村である。絵の下の説明はいずれも、隣の村との距離を記すだけの簡単なものである。ほとんどが上述のラヂシチェフ『ペテルブルクからモスクワへの旅』に登場する名前であるから、スケッチと説明を18世紀末の『旅』記述・場面と比較することは興味深い論点である。No. 32【図版10】はラヂシチェフがああ純朴なアニユータを抱擁し接吻したと記される湖岸の村エドロヴォだが、ここには手

³⁶ 18世紀末には「ヴァルダイの娘」が表象化されていた（Радищев, 1992 : 58-59 注 657）。



*Jedronwa ein Dorf dem Großfürsten in Moskau gehörig liegt vier meilen von
Zimnagofra.*

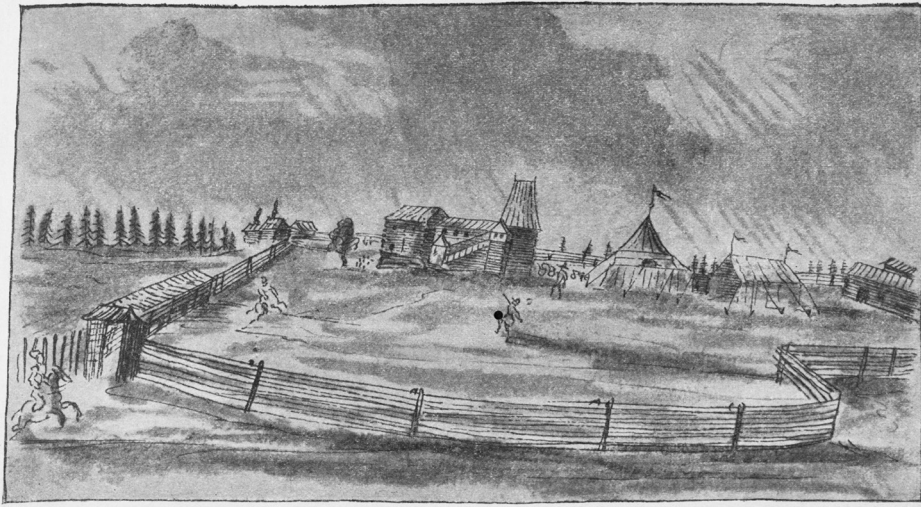
【図 10】 同前 No.32 エドロヴォ

前に杖を手にした聖職者と思しき人物と、ロシアの「原風景」³⁷が描かれるだけである。マイエルベルクの見た中世ロシアの村がピョートル期以降の「近代化」の過程でどのように変貌したのか、その変化をいかに観察・記述するかがラヂシチェフ、そしてプーシキンらロシア・インテリゲンツィヤの存在証明としての大きな課題となる。

(7)「モスクワ近郊の貴族屋敷村」(No. 50-52)

ペシキから目的地のモスクワまでほぼ50キロメートル、ほんの一息である。街道沿いで休憩したチャシニコヴォ村 (No. 50)、チェルキゾヴォ村 (No.51) の光景が描かれ、スケッチ下の説明には簡単に、モスクワ大公の所有の村であること、そして前村からの距離が記される。最後のニコリスコエ村 (No. 52 【図版 11】) には少し詳しい記述がある。「ニコリスコエ、あるいはニコラ村、ある貴族の屋敷 Hof (ロシア語訳は *дача*)、教会、村。ここではわれわれのために、赤と緑の二つのテントが作られたが、いきなり雷と稲妻を伴う豪雨が襲ってきたので、最寄りのあずまやに避難しなければならなかった。それは都モスクワから2マイル少し、チェルキゾヴォから3マイルの所にあった」。実は、これら三つの村は、モスクワから近いことから、大公ならびに古参の大貴族が所有する領地村 *усадьба* であった。貴族領主屋敷 *усадьба* は、通常は18世紀のピョートル期以降に力を得た新貴族に報賞として下賜されたものが中心だが、ここに描かれたのは、それ以前の古いタイプの貴族屋敷村である。チャシニコヴォとチェルキゾヴォはモスクワ大公の所領地であったものが、17世紀末にそれぞれソバーキン公、チェル

³⁷ 印象で言えば、農村の丸太小屋とともにスケッチに頻出する教会の尖塔、集落境界としての柵、杖を手に歩く人々の姿はロシアの「原風景」の一つを構成しているのではないか。



Nikolsko oder Nikola Wrebnе eines boiaren Hoff, Kirch und Wörffchen, alhie waren zuwo ein rothes und ein grünes gezeilt aufgeschlagen, auß welche wir uns weil ein großer regen mit donner und blitz sich sehr plötzlich erhub, in das darben gelegenes Lußhauß begeben müßten, lieget zuwo kleine meilen von der Hauptstadt Kriußkau, und drey meilen von Zerkisowo.

【図 11】 同前 No.52 モスクワ近郊ニコリスコエ

カスキイ公の所有となった屋敷村である。「ある貴族の」とされたニコリスコエ（現ニコリスコエ＝スヴェルチコヴォ）は古くからタチシチェフ家の所領であったと考えられる³⁸。

（8）「女性のタイプ」（No. 59-60 【図版 12-13】）

中世ロシアの女性の姿をヴィジュアルレベルでイメージしようとしても、肖像画を初めとしてごく例外的なもののみによるしかない。このように、さまざまなタイプの女性が群像として描かれたのは珍しく貴重であり、衣装、持ち物をはじめとした女性表象の分析が可能である。No. 59の説明は、上段左から、大貴族と公の妻、町人あるいは商人の妻、普通の町人と住人の妻、中段左から、冬服の御用人（後の新興貴族）妻、モスクワ住人の子ども、モスクワの娘、下段左から、華麗に着飾った大貴族あるいは公の妻、下層の娘、モスクワの農民女性。No. 60は、上段左から、雨で外套を裏返して着て、鞭を持つ女性（ロシア人ではなく、むしろタタール人に似るとのコメントあり）、貴族の妻、地面に付くほどの左袖の服をまとう貴族女性、下段は、左から庶民の娘、ヴァトカのタタール女性（服装からヴォチャク人かとのコメントあり）、弓矢を持つチェレミスのタタール女性。

³⁸ Чижков, 2006 : 198, 69, 64, 75. ただし、当時の木造教会は現存せず、現在ある石造教会の建立は1738 - 1758年。他に、オドエフスキイ家、ゴリツィン家が所領としたニコリスコエ＝ウリュピノ村とも考えられるが、ここに現存するニコラ教会の建立は1664 - 1665年。



【図 12】 同前 No.59 ロシア女性の衣装



【図 13】 同前 No.60 ロシアと他民族女性の衣装

(9)「施し」(No. 62【図版 14】)

全体は No. 61 からの続きでロシアの貨幣に関する文章による説明とそのスケッチである。ロシア通貨の観察は外国からの使節にとって最重要課題であり、詳細なスケッチは欠かせない(オレアリウスにも同様のスケッチがある)。ここではそれについて述べない。注目したいのは、貨幣図下の、おそらくは余白となる箇所を埋めるべく描かれた屋外の風景である。ここでは、両端手前に立つ、背が高く描かれているから高位の人物が中央の三名に対して施しをした、そしてすでに与えた場面である。右端の男性の左手に財布らしきものが見え、一人は受け取ろうとしている、左の一人はお礼の十字を切っている、そして真ん中の者は地上から拾おうとしているのか。二人のコメンティターは、やはり何といっても当時のロシアの貨幣状況が大きな論点であることから、その説明に多くのスペースを割き、この施しの場面に関しては、ごく簡単に触れる。施しを与える者を大公イワン・カリター(皮財布の意味)とする意図で絵師が描いたとするが、はたしてそのように言いきれるか、疑問が残る。

(10)「迎賓館の中庭」(No. 63)

この絵は 1903 年版の表紙にも使用されているとおり(【図版 3】)、使節団が滞在した迎賓館中庭の全景である。迎賓館はクレムリンから程近いキタイ・ゴロドにあった³⁹。絵下の説明には 1-17 の番号が付けられ、建物の機能と使用者(例えばマイエルベルクの部屋は 1、使節聖職者の部屋は 11、絵師の部屋は 13、使用人食堂は 17、丸天井付き回廊 9、中庭への門 10、氷室 14 等)が記されている。15、16 はそれぞれ「古式ボーリング用の場所」「輪遊び」とされ、使節団が興じていることからすれば、ロシアの遊戯ではないだろう。この時期のロシアでどのような遊びがされていたか、資料が皆無であるから仕方がない。ちなみに、同じこの迎賓館中庭はオレアリウスの旅行記にも挿絵として収録されているが(【図版 15】)、こちらは路上の犬等々描写がきわめてリアルである。

(11)「宮中の玉座を前に」(No. 77【図版 16】)

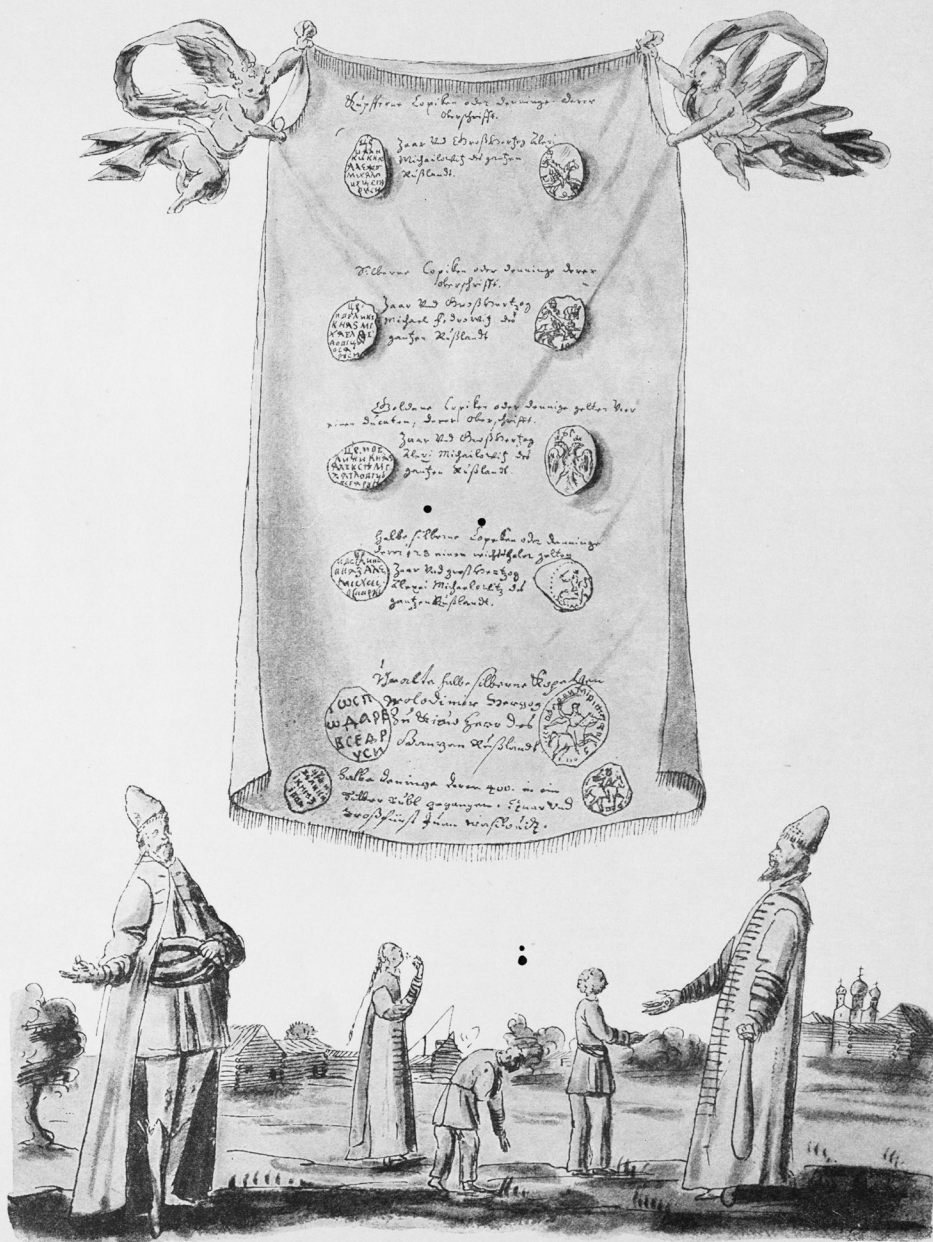
画帖の中での圧巻は、モスクワへの入場(No. 53)、宮廷内でのツァーリとの面会(No. 54)、クレムリン全景(No. 55-56)、赤の広場での柳の日曜日の儀礼(No. 73)であろう。これは文字通りモスクワ・クレムリン、そしてツァーリ拝謁が使節団の派遣全体で最大とも言えるイベントであることから当然である。そうした中、ツァーリ・アレクセイとは全部で 3(ないし 4)度の謁見を果たし、最後は、それまで「外国人使節は入ることを決して許されなかったツァーリの部屋、あるいはカビネット」へ招き入れられた。

招待は、使節団のモスクワ出立が決まった後の 1662 年 4 月 24 日のことで、ツァーリのきわめて私的な接見である。「さまざまな飲み物が振る舞われたが、ローマ皇帝の健康を祈る際には帽子を取られて飲み干された」。絵では、玉座から立ちあがったツァーリが乾杯をする前か後か、手前にマイエルベルクとカルブッチの背中が見える。9 は通訳のヤコフ・ヴィーバー、10 は使節聖職者のセバスチャン・グラヴィニフ、11 は秘書ミハイル・ガマー、12 が絵師のシュトルンである。部屋(アデルンクは「カビネット」、ロヴァギンは「前広間」⁴⁰とする)のイン

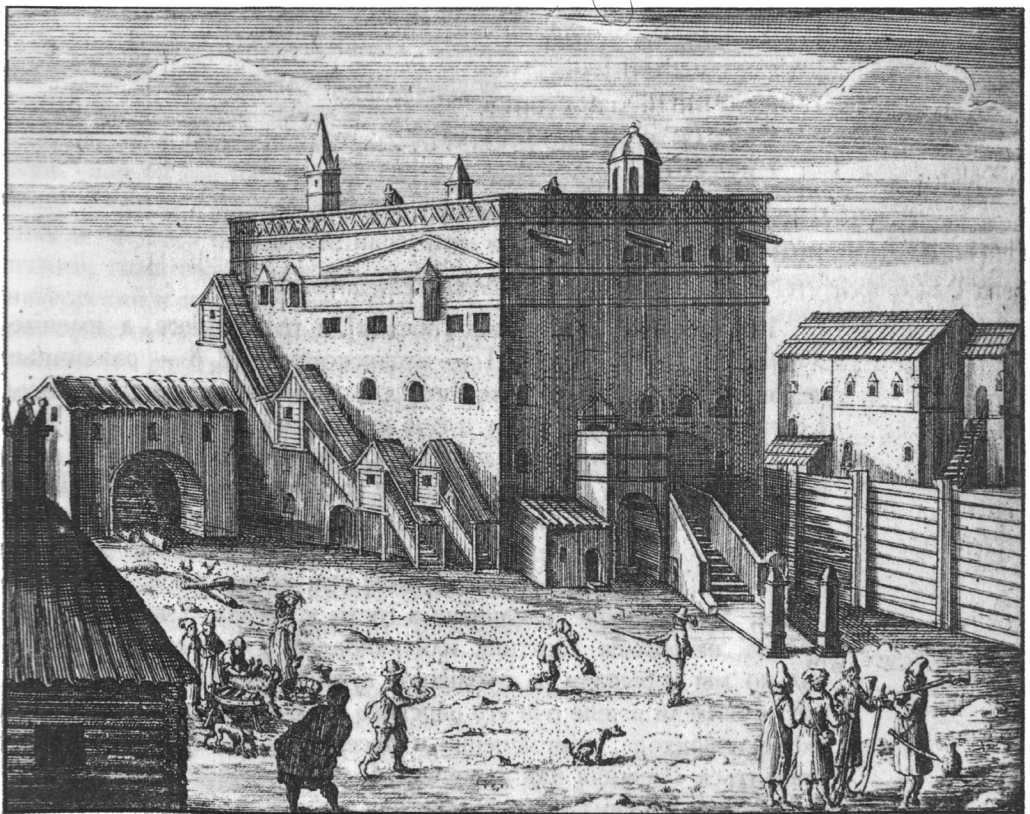
³⁹ 迎賓館に関しては、とりあえずコトシーヒン(2003: 119 注 5)、迎賓館の警護体制に関しても、同じくコトシーヒン(2003: 130 注 16)を参照。

⁴⁰ コトシーヒン(2003: 74 注 37)。

Мушкетёрские монеты.



【図 14】 同前 No.62 モスクワの貨幣と施し



【図 15】迎賓館中庭 オレアリウス旅行記より



【図 16】ロヴァギン編アルバム No.77 ツァーリ宮殿にて

テリア、すなわち、壁紙、床とそのカーペット、壁・タイルに描かれた各種の文様と絵、照明、玉座に関して、また、ツァーリだけでなく室内に陪席するロシア貴族たちの服装、その場に招待されたマイエルベルクを初めとした使節団の面々の衣装、ツァーリの座と使節団との距離等に関しては、アデルンク、さらにそれを新発見資料によって入念に補足したロヴァギンのコメントに詳しい（見聞録本文との異同の指摘も含む）ので、繰り返さない。一つだけ指摘しておく。玉座が部屋の中央ではなく隅、窓寄りの場所にあることが画帖のこの絵から明らかである。これに関しては、E. B. プチェロフによる研究成果⁴¹が参考になるが、さらに玉座をめぐる多くの調査と考察が必要となる。

以上、検討対象の例をあげたが、残された事項は多い。例えば、風景画面に頻繁に登場する農民の丸太小屋（これに関しては、すでに本節冒頭で記したとおり、研究成果があり、当時の住居の具体を忠実に再現するとした建築史上で貴重な資料として注目され、詳細な分析がされている）の他、移動手段（ロシア宮廷人・聖職者の馬車ならびに橇 No. 68-72、ロシア人の帆船、使節団の舟ならびに筏その他、特に渡河⁴²）、運搬手段（肩に担ぐ、筏で荷物を運ぶ、馬で、等）等は民族学・物質文化研究の枠内で検討がなされなければならない。その他、いくらか気が付いたままにあげれば、町村・共同体の境界としての柵・入口、畑の畝、宮中における要人の席順・立ち位置順（Г. К. コトシーヒンに詳述される外国使節の賄いや警護等の迎え方、また、位格・序列等に関する詳細な規定の記述⁴³との対照が必要である）、行進・行列を初めとする各種儀式やお辞儀・叩頭・懇請等々のエチケット（例えば、No. 84に見られる身振りと「額を打つ」というロシア語表現の意味論との関わり等）、さらにはロシア側の歓迎・護衛の実際（迎え入れ・拝謁式・正餐⁴⁴、滞在・賄い（糧食 **корм**）・宿泊地の警護他）、ツァーリの娯楽（例えば、No. 76に記されたタカ狩り）等、これまでの「古典的な」狭義のディシプリンではカバーできない分野の調査が要求される。それを仮に習俗誌（あるいは、日常文化誌）とでも呼ぶならば、それらの調査作業を継続することが今後の課題となる。

マイエルベルクの画帖の絵が『モスクワへの旅』本文の重要性に劣らず、時により大きな意味を持つ場合があることは改めて繰り返さない。画帖は見聞録に添えられた付録でも、本文を補足説明のためのイラストでもなかった。ラテン語で記された見聞録本文には読むことのできない事実が、絵の下に解説としてドイツ語で書かれていること、そして何よりも、前近代ロシアの農村と町と宮廷の実相、自然環境と人々の暮らし、日常・習俗が織りなす風景をヴィジュアルに伝えることが画帖の大きな意義である。「全体としての画帖」の考察が必要となるゆえんである。

5.

前近代ロシアに関する史学史において、外国人によって書かれた旅行記は、ロシア革命前に

⁴¹ 例えば、玉座の位置と農家の「聖なる（赤い）隅」との類縁性の指摘等（Пчелов, 2009）。

⁴² 渡河の場面はきわめて多い（No. 26、28、29、35、36、42、43、45、47等）。移動地域がまさしく平原地帯であることを十分教えてくれる。

⁴³ コトシーヒン、第5章、118注2他。

⁴⁴ モスクワ宮廷による歓迎の儀式に関してはユゼフォヴィチの仕事（1988）が古典であり、増補改訂版（2007）の注に近年の研究史を読むことができる（Юзефович, 2007 : 323-324）。ただし、叙述対象となる時期は17世紀半ばまでである。

は相応の関心対象となっていた。先述したアデルンクが作成した書誌を端緒に、C. M. ソロヴィヨフ『ロシア史』、H. И. コストマロフ『16-17 世紀大ロシア人の家庭生活・風習概観』、И. Е. ザバーリン『16-17 世紀のロシア・ツァーリの家庭生活』等々の著作には多数の引用が見られた。大きな成果はクリュチェフスキイである。と言っても、ごく一部の引用に留まった主著『ロシア史講義』ではなく、博士候補論文として書かれ、彼の最初の学術的著作として 1866 年に刊行された『モスクワ国に関する外国人の物語』（再版は 1916、1918）⁴⁵である。この著作が有する多くの問題点（方法ならびに全体構想）に関してここで述べる余裕はないが、外国人旅行記 40 点余りを基本資料として 18 世紀以前のロシア国家・社会像を再構築しようとした試みである。そのために、時にロシアに対する差別的とも見える外国人の「浅薄な理解」にもとづく、バイアスの多い記述を「公平な精神」で組み立て直したのであり、マイエルベルクからも多くの引用がなされている⁴⁶。

ソ連時代に入ると、おそらく排外的なイデオロギーが優勢となる中で、外国人旅行記が歴史学の研究対象ならびに基本資料として扱われることは、ごく少数の例外を除いて⁴⁷、ほとんどなくなった。上記クリュチェフスキイの著作が、その存在を専門の歴史家にさえ知られず⁴⁸、『著作集』（全 8 巻、1956-1959）にも収録されなかったことがその証左となろう。そして、外国人旅行記が言及される場合にも、外国人、しかもロシアに関する正確な情報を持たない人々が叙述したとされ、アプリオリに資料批判以前の「誤謬」情報として扱われるのが一般的だった。こうした状況は、ペレストロイカならびにソ連崩壊後に急激に変貌する。外国人旅行記の新ロシア語訳やテキストそのものの研究成果は十分ではなく、旅行記ロシア語版は革命前に行われ

⁴⁵ 1991 年に再版された『物語』（Ключевский, 1991）には、本文の他に 100 ページにも及ぶ膨大なコメンタリー、後書き（著者は А. Н. Медшечевский）が付されている。

⁴⁶ バーンズ, 2010: 106-108. クリュチェフスキイが参照したマイエルベルクの旅行記はフランス語版「ロシア、ポーランド文庫」第二巻（ジュネーブ、1858）である。ただし、クリュチェフスキイがスケッチも参照したことが『ロシア史講話』に言及されている（Ключевский, 1908: 350）。

⁴⁷ 例外としてあげられるのは、М. А. アルパトフ『ロシアの歴史思想と西欧 17-18 世紀四分の一世紀』（1976）か。ただし、史学史関連の叙述に多くのスペースが割かれ、しかもマイエルベルクに関する記事には間違いが多い（Алпатов, 1976）。Ю. А. リモノフ『ロシアとヨーロッパ諸国の文化的関係』（1978）も手堅い仕事だが、不十分である（Лимонов, 1978）。Н. А. カザコヴァ『15-16 世紀ロシア文献における西欧』（1980）は、時代も古く、視点の方向が逆だが、例えば次のような指摘には参考になる点が多い。彼女によれば、文化的関係において「文化の国際関係は多面的概念であり、その本質的構成要素となるのは、お互いが所有するインフォメーションの問題」であり、すでに 15-16 世紀の西欧諸国にはロシアに対する鋭敏な関心が芽生えていた。「ロシアに関する外国人の著作は一度ならず詳細な研究の対象となってきた。だが、反対に、ピョートル以前のロシアで、西欧に関するいかなる情報があったのか、についてはほとんどこれまで研究されてこなかった」（Казакова, 1980: 5-6 ここには、クリュチェフスキイ『物語』の言及がある）。むしろ、比較文学・比較文化の枠で見れば、ソ連期にあっても、限定的だが、例えば М. П. アレクセーエフらの仕事大きな成果をもたらしてきた。このアレクセーエフを記念して定期的に開催されてきた研究会（第 10 回、2000 年 6 月、プーシキン館）の報告集（Дипломаты – писатели, 2001）には、オレアリウスに関して、ダニレフスキイ論考「バロックと啓蒙の狭間で」とアレクセーエフ「モスクワとヴォルガのパウル・フレミング」（1927-1930）が掲載され、注目される。ただし、マイエルベルクの言及はない。また、歴史家による近年の成果として、Л. О. ポルトノフ「モスクワ人の歴史的記憶に関する外国人（17 世紀後半旅行者の著作を資料として）」（Портнов, 1997）。ここにはマイエルベルクの見聞録からの引用がある。

⁴⁸ クリュチェフスキイ史学初期の習俗史的側面をソ連時代に再評価したのは А. А. ジミン（Зимин, 1961）。

た翻訳の再版がほとんどだが⁴⁹、今後は本国ならではの多くの仕事生まれるはずである。

しかし、問題は楽観的でなく、研究上のテクノクラートの利用と成果の増大に満足してはいられまい。先に、ソ連時代には、排外的イデオロギーの影響で外国人旅行記がほとんど顧みられなかったとしたが、この問題は、旅行記テキストへのアプローチをめぐる方法論に深く関わる大きな課題として今なお存在するからである。特に、前近代のロシア社会に対する、外国人の誤解と偏見の集積がロシア言説を形成してきたとすれば⁵⁰、外国人による文化観察と記録の「歪みとズレ」の問題は、技術的な「資料批判」にとどまらず、ある種のオリエンタリズムをめぐる問題群へとつながっていく⁵¹。かつて形成されたロシア言説の影響が現代にまで及ぶのは当然である。

本稿冒頭で、18世紀以前のロシアが「自己・自他認識としての文化」を獲得していなかったとしたが、そのことは、言い換えれば、ロシアが「文化の一元化」を基軸として、世俗的な部分（それを習俗 *быт* と呼びたい）が顕在しにくい社会であるということである。文字文化に関して言えば、クリュチェフスキイが外国人旅行記を、そして次の著作『歴史資料としての中世ロシアの聖者伝』（1871）のために聖者伝を敢えて基本文献としたことは、18世紀以前のロシア社会のテキストがきわめて「限定的」であり、「傾向的」であることを物語っている。だとすれば、教会とその壁画・天井画、イコン、そして都市の要塞と住宅、農家室内の丸太壁やインテリア、室内外の装飾・紋様、柵・塀や門、持ち物・生活用具等々、ロシアの視覚文化を構成する無数のモノを再構成するために必要な資料として、外国人の筆になるスケッチは中世ロシア文化像を再構築する上で不可欠なテキストとなるはずである。

マイエルベルクが旅した時期を振り返るならば、それはピョートル登場に先立つ数十年前の改革「前夜」であった。ルーシがロシアへ変貌し、何のミッシング・リンクもないまま、いきなりグローバリゼーションの舞台へと「乱入」していく直前であり、大きな過渡期＝転形期にあたっていた。時に、息子ピョートル大帝との対比から、父アレクセイ帝に「もっとも静かな」の枕詞を付すことがある。それは、文化記号論レベルだけでなく、民衆の歴史・時代表象のレベルでもきわめて的確な名付けである。17世紀を「ブントの世紀」と呼び、それと同時に「静寂・穏やかな」ツァーリの支配下にあったとする民衆語源的ダイナミズムを示すからである。ロシアが中世「カオス」を抜けて、近代への「暴発的」突入を果たす直前にマイエルベルクはモス

⁴⁹ 歴史学関連の優れた書誌として知られる『日記と回想に見る革命前ロシア史』第一巻Ⅲの「絶対主義への移行期におけるロシア国家」総論部分にリストアップされる外国人の記録は、コリンズ、オレアリウス、マイエルベルクを含めて全部で9点を数える（История, 1976: 68-69）。その後新しく刊行されたものとして、オランダ人ヴィッツェンの旅行記がある。これは、その存在は革命前から知られていたが、1966 - 1967年にハーグで初めて刊行された。彼のモスクワ旅行記は *Витсен* (1996)、研究は *Кирпичников* (1995)、中村 (2006) により概要を知ることが出来る。訪問時期がマイエルベルクに近いことは興味深い。

⁵⁰ 第二次世界大戦後のアメリカの対ソ戦略構築の中核にいたジョージ・ケナンの発言から稿を起したポー (2000) の序文を参照 (Poe, 2000: 1-3)。

⁵¹ 外国人による他文化の観察と記述に関して言えば、それまでアカデミズムが狭義の資料批判のレベルで、記事の「歪みとズレ」を一方向的に無視・切り捨てていたのを、逆手に取る形で議論の俎上にあげた一例は、渡辺 (1998)。彼は、日本・明治期に訪問した外国人の記録を丁寧に読み解き、その誤解と「歪み」にこそ意味があるとし、これまでの日本人の日本文化理解・研究の「自己満足性」へ強烈な批判を行うが、安易なオリエンタリズム理解への批判でもある。同じく外国人による記録の「歪みの係数」を明確化すべきとするロートマンの論考も参照 (*Лотман*, 1976)。

クワを訪問したのである。

マイエルベルグのロシア旅行から約一世紀半以上たって、詩人アレクサンドル・プーシキンがマイエルベルクに言及する。彼は、社会の記憶から失われつつあるラヂシチェフの発禁本『ペテルブルクからモスクワへの旅』を手に、ラヂシチェフとは逆コースを取って移動し、その旅行記を文章化しようと考えた。その旅の途上でマイエルベルクを思い出すのである。それはアデルンクの書が1827年に刊行された後のことである（むろん、プーシキンはそれを購入・所有していた⁵²）。プーシキンの「モスクワからペテルブルクの旅」は完成されず、詩人の死後、原稿が活字化されるが、そこにマイエルベルクの名前が記されていた。

ロシアの農民小屋の外見は、マイエルベルクの時代からほとんど変わっていない。1833年のロシアの村は1662年のロシアの村と一分の違いもない。小屋、水車、塀、ここに生える北の自然の悲しい烙印であるトウヒでさえ、何も変わっていないように見える⁵³

これを単なる詩人の感傷と見るのは大きな間違いであろう。この一文からは、ピョートル期の前と後の時代の「連続性」・「断絶性」、そしてナロードの生活とランドシャフトの「変質」と「停滞」といったロシア文化史をめぐる根深い問題系が浮かび上がってくるのだから。ロシアの農村の実相を前にするプーシキンには、18世紀に始まるロシア近代化に対する深く真摯な洞察こそが求められていた。マイエルベルク存在をロシア社会に知らしめたアデルンクが彼の先駆的著作の序文の最後に、マイエルベルクのテキストが「一部習俗の記述として、そして、ロシアにおける啓蒙の成功の歴史として極めて多くの興味あるものとなっている」⁵⁴と記しているのを読んだ時、プーシキンはどういう感慨を抱いたのだろうか。

付記

本稿で検討した1903年版の原本を、著者がモスクワ中心部にあったイヴァン・フョードロフ像脇の古本屋で見つけ購入したのは1981年秋のことである。二つ折で、四隅が破損し、本棚横に乱雑に積まれていた。その後、長らく放置したままだったが、書籍修復家の岡本幸治氏から、状態が悪いことに加えて、刊行年代が酸性紙の全盛期にあたり、このままでは保存不可能との診断を得た。同氏に依頼して修理・造本されてこの画帖が見事に蘇ったことを記しておく。

⁵² プーシキンの蔵書目録にアデルンクの1827年版が収蔵されている（ただし、画帖はない）。ページは切ってあるが、書き込みがないため（Модзалевский, 1910 (1988) : 64）、読んだことの直接証明は不可能である。

⁵³ Пушкин, 1956 : 256.

⁵⁴ Аделунг, 1827 : VI.

〈参考文献〉

- А. К., 1896 А. К. Мейерберг / Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона. Т. 36, СПб.
- Аделунг, 1827 Барон Мейерберг и путешествие по России с присовокуплением рисунков представляющих виды, обряды, портреты и т.п. в продолжение сего пришествия собранных. Издано Федором Аделунгом, действ. Статским Советником и кавалером. СПб.
- Алпатов, 1976 Алпатов М. А. Русская историческая мысль и западная Европа. XVII-первая четверть XVIII века. М.
- Байбурин и Топорков, 1990 Байбурин А. К. И Топорков У истоков этикета. Л.
- Берков, 1971 Берков П. Н. О литературе так называемого переходного периода. / Исследования и материалы по древнерусской литературе. М.
- Бочкарев, 1914 (сост.) Бочкарев В. Н. Московское государство XV-XVII вв. По сказаниям современников-иностранцев. СПб. (2-е изд., 2000. М.)
- Витсен, 1996 Витсен Н. Путешествие в Московию, 1664-1665. Пер. со старо-голландского В. Трисман. СПб.
- Герасимова, 1991 (сост.) Герасимова И. Проезжая по Московии (Россия XVI-XVII веков глазами дипломатов). М.
- Громов, 1955 Громов Г.Г. Альбом Мейерберга как источник по истории русского крестьянского жилища / Советская этнография, № 1.
- Дипломаты, 2001 Дипломаты - писатели : писатели – дипломаты. Сост. В. Е. Багно. СПб.
- Зимин, 1961 Зимин А. А. Формирование исторических взглядов В. О. Ключевского в 60-е гг. XIX в. / Исторические записки. Т. 69.
- История, 1976 История дореволюционной России в дневниках и воспоминаниях. Т. 1, XV-XVIII века. М.
- Казакова, 1980 Казакова Н. А. Западная Европа в русской письменности XV-XVI веков. Из истории международных культурных связей России. Л.
- Кантор, 1999 Кантор А. М. Духовный мир русского горожанина. Вторая половина XVII века. Очерки. М.
- Карпов, 1994 Карпов Г. М. Русская культура на пороге новой эпохи. XVIII век. М.
- Кирпичников, 1995 Кирпичников А. Н. Россия XVIII века в рисунках и описаниях голландского путешественника Николааса Витсена. СПб.
- Ключевский, 1991 (1866, 1916, 1918) Ключевский В. О. Сказания иностранцев о Московском государстве. М.
- Ключевский, 1908 Ключевский В. О. Курс русской истории. Ч. III, М. (クリュチェフスキー『ロシア史講話』3、八重樫喬任訳 (恒文社、1982))
- Лимонов, 1978 Лимонов Ю. А. Культурные связи России с европейскими странами в XV-XVII вв. Л.
- Ловягин, 1903 Альбом Мейерберга. Виды и бытовые картины России XVIII века. Объяснительные примечания к рисункам составлены Ф. Аделунгом, вновь просмо-

- трены и дополнегы А. М. Ловягиным. СПб. (Т. 1. Рисунки Дрезденского альбома, воспроизведенные с подлинника в натуральную величину, с приложением карты пути цесарского посольства 1661 – 62 гг. ; Т. 2 Объяснительные примечания к рисункам. Сост. Ф. П. Аделунгом, вновь просмотр. и доп. А. М. Ловягиным).
- Лотман, 1976 Лотман Ю. М. К вопросу об источниковедческом значении высказываний иностранцев о России / Сравнительное изучение литератур. М.
- Луппов, 1973 Луппов С. П. Книга в России в первой четверти XVIII века. Л.
- Милоков, 2000 Милоков С. Г. Мейерберг / Отечественная история. Энциклопедия. Т. 3, М.
- Модзалевский, 1910 (1988) Модзалевский Б. Л. Библиотека Пушкина. СПб.
- Олеарий, 1996 Олеарий А. Описание путешествия в Московию. М.
- Очерки русской культуры XVII века. М.
- Панченко, 1984 Панченко А. М. Русская культура в кануне петровских реформ. Л.
- Портнов, 1997 Портнов Л. О. Иностранцы об исторической памяти москвитов (по материалам сочинений путешественников второй половины XVII в.) / Россия и внешний мир : диалог культур. Сб. ст. М.
- Пушкин, 1956 Пушкин А. С. Путешествие из Москвы в Петербург / Полное собрание сочинений. Т. XI, СПб.
- Путешествие, 1874 Путешествие в Московию барона Августина Майерберга, члена императорского придворного совета, и Горация Вильгельма Кальвуччи, кавалера и члена Правительственного совета Нижней Австрии, послов августейшего римского императора Леопольда к царю и великому князю Алексею Михайловичу в 1661 году, описанное самим бароном Майербергом. Отд. Отт, М., 1874. (Издание Императорском Обществе Истории и Древностей Российских при Московском Университете, ЧОИДР 1874 г. кн.1-я)
- Пчелов, 2009 Пчелов Е.В. Солнце, царь и икона : топография тронного места Московской Руси / Вестник РГГУ. Серия « Исторические науки. Историография, источниковедение, методы исторических исследований». № 4.
- Рабинович, 1978 Рабинович М. Г. Очерки этнографии русского феодального города. М.
- Радищев, 1992 Радищев А. Н. Путешествие из Петербурга в Москву. СПб.
- Робинсон, 1976 (отв. ред.) Робинсон А. Н. Новые черты в русской литературе и искусстве. М.
- Россия и внешний мир, 1997 Россия и внешний мир : диалог культур. Сб. ст. М.
- Сухман, 1991 (сост.) Сухман М. М. Иностранцы о древней Москве. М.
- Фалькович, 1913 (сост.) Фалькович П. Картины жизни в московском государстве. В извлеч. Из записок иностранцев о России XVI-XVII вв. М.
- Цимерманис, 1968 Цимерманис С. Я. Альбом путешествия А. Мейерберга как источник для изучения истории латышской культуры / Тезисы докладов и сообщений конференции по источниковедческим проблемам истории народов Прибалтики, Рига.
- Цимерманис, 1970 Цимерманис С. Я. Альбом путешествия И. Р. Штурна 1661-1662

годов как источник изучения истории материальной культуры / Источниковедческие проблемы истории народов Прибалтики. Рига.

Цимерманис, 1980 Цимерманис С. Я. и Моркунас В. И. Об историко-этнографических областях в Латвии и Литве во второй половине XIX в. / Этнографические и лингвистические аспекты этнической истории балтских народов. Рига.

Черная, 1999 Черная Л. А. Русская культура переходного периода от средневековья к новому времени. М.

Чижков, 2006 Чижков А. Б. Подмосковные усадьбы. 3-е изд, переработанное и дополненное. М.

Юзефович, 1988 Юзефович Л. А. «Как в посольских обычаях ведется ...». М.

Юзефович, 2007 Юзефович Л. А. Путь посла. Русский посольский обычай. Обиход. Этикет. Церемониал. Конец XV-первая половина XVII в. СПб.

Adelung, 170 Adelung F. Kritisch-Literarische Übersicht der Reisenden in Russland bis 1700. Band 1-2. St. Petersburg, Leipzig.

Cross, 1971 Cross A. Russia under Western Eyes 1517-1825. London.

Grumblerr, 2013 Grumblerr von Wezak und Magnusholm Дневник лентяя-трудоголика. (<http://grumblerr.livejournal.com/191580.html> (2014 年 12 月 6 日))

Mayerberg, 1688 Augustin Baron Mayerberg Relation d'un Voyage en Moscovie, d'un Ambassadeur, Conseiller de la Chambre Imperiale, Envoye par L'Empereur Leopold au Czar Alexis Mihalowics, Grand Duc de Moscovie. Marchand Libraire. Leiden.

Poe, 1995 Poe M. Foreign Descriptions of Muscovy ; An Analytic Bibliography of Primary and Secondary Sources. Columbus, Ohio.

Poe, 2000 Poe M. "A People Born to Slavery" ; Russia in Early Modern European Ethnography, 1476-1748. Ithaca, N.Y.

Poe, 2003 M. Poe Early Exploration of Russia. 第4巻 フランス語版 (Mayerberg, 1688) のリプリント版

Poe, 2010 M. Poe The Public Face of Private Life : The Family-Presentation Ritual in Moscovite Russia / Everyday life in Russian history : quotidian studies in honor of Daniel Kaiser. Bloomington, Indiana.

Wilson, 1970 Wilson F. Muscovy. Russia through foreign eyes. 1553-1900. London.

加藤, 1987 加藤一郎「西欧人による中世ロシアの「発見」— 外国人の目にうつったモスクワ国家」『文教大学教育学部紀要』第21集

クライナー, 1996 ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルの見た日本』(日本放送出版協会)

コトシーヒン, 2003 『ピョートル前夜のロシア 亡命ロシア外交官コトシーヒンの手記』松木栄三編訳(彩流社)

中村, 2006 中村喜和「オランダ人ヴィッツェンのモスクワ旅行記」同著『ロシアの木霊』(風行社)所収

田辺, 2001 田辺三千広「ホーセイの『モスクワの記録』」宮崎揚弘編『続・ヨーロッパ世界と旅』(法政大学出版局)所収

坂内, 1991 坂内徳明「ロシアのブランコ その「解釈」をめぐって」同著『ロシア文化の基層』(日本エディタースクール出版部)所収

渡辺, 1998 渡辺京二『逝きし世の面影』（葦書房）
ラエフ, 2001 マルク・ラエフ『ロシア史を読む』石井規衛訳（名古屋大学出版会）
バーンズ, 2010 ロバート・F・バーンズ『ロシアの歴史家 V・O・クリュチェフスキー』
清水昭雄、加藤史朗、土肥恒之訳（彩流社）